

〔翻刻〕 中村敬宇日記

ここには、次の中村敬宇の自筆日記を翻刻した。

明治九年家乗

（静嘉堂文庫蔵「敬宇日乗一」）

明治十五年日乗

十六年一月迄

（静嘉堂文庫蔵「敬宇日乗二」）

明治十五年日乗

七月二十四日ヨリ十六年一月ニ至ル

（静嘉堂文庫蔵「敬宇日乗三」）

明治十七年日乗

（中村家蔵）

日乗 明治十七年九月六日ヨリ

（静嘉堂文庫蔵「敬宇日乗八」）

明治十八年日乗 旦ヨリ今

（静嘉堂文庫蔵「敬宇日乗四」）

明治十九年日録

（静嘉堂文庫蔵「敬宇日乗五」）

明治二十年日録

（静嘉堂文庫蔵「敬宇日乗六」）

明治二十一年日記

（静嘉堂文庫蔵「敬宇日乗七」）

*「明治十七年家乗」は荻原隆氏ご恵与の複写版に基づき、その他は静嘉堂文庫に依頼して作成した複写版に基づいて翻刻した。

【凡例】

一、判読困難な箇所は□で示し、文字数が不明な場合は□―□で示した。

一、消去、塗抹箇所は□で囲み、できるだけその文字の復元につとめた。

詩文の推敲や書簡の下書きなど、消去・訂正が繰り返されている場合、次のように示した。

一八九
五六七
十
三三四

この場合、最終的には「一八九七十」と訂正されたことになる。なお、推敲跡が煩雑と思える時には、*を付し、該当箇所に訂正後の文を改めて掲げた。

一、原文に文字囲みが施されている場合は、□で表示した。

一、行中に二列にわたって施されている細字の割注箇所は「」で示したが、細字にはしていない。

一、文中の追記・挿入箇所には圈点（・）を付した。

一、上欄外の書き込みはへ～を用いて示した。

一、敬宇自身が付している記号は「ママ」とルビを振った。

一、英文の抹消箇所は―で示し、不明箇所は…で示した。

一、闕字や誤記など、原文通りであるものには「ママ」と、判読が困難な箇所で推定したものには「カ」とルビを付した。

一、体裁に関する説明は「」を用いて文中に示した。

一、校訂者の注記は、詩文に関するものにとどめ、（１）（２）…を付し、末尾にまとめて掲げた。ただし、異同は示していない。

一、典籍などからの引用に関しては、原文にまでわたっては校訂しなかった。

明治九年家乘

元史纂要卜風呂數

所為皆可对人言

會計入出帳ノ終リニ付ル惣目

入

出

〔明治六年ヨリ同八年十二月迄〕

入門金月費賄税 二九六、二五五 明治六年九月ヨリ

月謝

講堂塾ヘヤ等當繕 二八、〇五八

塾部屋新築并當繕 二〇、六〇七

教官其他月給字僕

杜納金

日用雜費

書籍買入価

器械買入価

一 建築并當繕

一 教場入費不足補

一 遣払之口

一 別口塾部屋新築其外所々當繕

〔遣払〕

明治九年一月

二十八日 艸明善館記

二月一日 〔火〕午前十時會于杉浦露山宅、為謀議訓盲事故也、

會者為前島密、小松彰及旧盟友津田仙、古川正雄、岸田吟香并予与主人共
七人、是日^{今日}之初會而新入社者皆為有名官員、本社之旺盛自此日始矣

跛予望之 是日書明善館記、使小价持贈之於大久保一翁

〔古川正雄託余以作箴言序〕

二日 〔水〕送葉善社会条例于小松彰、設立訓盲所勸進廣告文于前島密

女教師始學英語、余往監之 野村素介求愛敬餘唱、且示以近製 田中不二

曆書來約余五日三時會昌平館 看女校

三日 〔木〕看女校 岡本監輔來談唐国事

接世良太一書問甲乙兩議孰可否

辻竹藏携其兒來見 小林卷藏來見

初逢松本萬年于女校 六書通四書大全辯閱市偶得之

四日 〔金〕川田熙來議分校事、木平氏來會

今日カクラン氏^{遷移}家于駿河台

五日 〔土〕訪柴田氏談千村氏事 訪カクラン新居 看校

昌平館小集、会主田中不二齋、客者津田、西、箕作、辻、加藤及余也

六日 〔日〕カクラン氏講聖經于校^{榎本校}社

夜柴田氏來談 大井氏 高谷龍洲來 山田氏來

〔乍茶 窄柴 斬産 章唱 非吵〕

七日 〔月〕看校 得辻竹藏書言囑其兒之事 自朝雨

〔這車 吉奇 這 真臣 正成 吉奇 家恰楷〕

奉呈玉舟先生仍用先生韻〔〕

胸裏寧容一物留。光風霽月意休々。除詩酒外無他好。脱垢塵中有底愁。

碧水悠々唯所適。白鷗炯々更何求。先生占斷墨陀勝。不数人間万户侯。

以^天雨不至葉松石宅 待柴田、千村、不至

〔十日 麥氏看校〕

八日 〈火 葉〉看校 抵葉松石家 柴田、千村二子見訪

〈十一日十時当会前島氏宅〉

〈十二日麥^(左馬)□看校〉

九日 〈水〉曉訪辻氏 浜尾新来言関信三事 租税助若山儀一

榊園榮樹需菅公詠詩因賦

君思隆渥致蕞菲、^{祀廟于秋仰}德威。当日^{權如何所得}□努^{魂魄}蕩無歸。^{今祀明神有}剩金

Mr.F.A.Meyer.采観借宅

〈十三日麥氏校〉

〈十四日葉松石〉

〈十六日明六社 前島氏〉

十日 〈木〉看校 桜井忠温、辻新次、麥氏来于校

講答陳商書

〈二十一日葉松石〉

十一日 〈金〉

Feb. 11, 1876

Mr. Meyer.

Dear Sir

A few days ago you came to see the house to be let^{let}, I am sorry to say that I was receiving my friend in my room & /.../ missed to see you.

I wish very much to /receive/ have you as my neighbour-friend, & your family as my families' friends.

Touching the house rent, I can not make cheaper than the present price. The price being already settled /at both/ with parties /very friendly/ honorable & kindly wishes in both parties, it is not by no means dear, /but/ very cheap.

/But there is another con...tion. Now this house rent belongs on some gentleman who has lend me money enough to build this house./

/But if you think it is to be ... dear, I shall make it lower than at present./

Perhaps years afterwards I /can/ shall make it cheaper than at present. But I cannot tell this particulars

In the least one year & half I cannot the /price/ rent cheaper than a month /30 y/ thirty yens. (30 ryōs, 1 month.)

I expect you & your family teach Eng. in my sho^{school}, & I shall /pay many/ assist you & make you good

十一日 〈金〉会前島密宅、古川、杉浦、岸田、小松、津田等皆在座、再約十六日午後微会

訪梅淺草寺辺^カ而帰

呈桜墩先生

身如凍雀不堪寒、心似懶猶貪苟安、儼被青山頑叟誘、江東行必待渥就

十二日 〈土〉曉為中鳥翠堂書碑面大字 向山黃山見訪、俱至墨堤、晤桜墩、

至磐翁宅、観古物并書篇、至晚而帰 木村二梅来会

十三日 〈日〉雪 曉看校、集生徒有所說話 西裨雜纂十三部分贈 格郎公

来講道 晚訪川田甕江

雪又紛々作曉寒、幸欣昨日候君安、遙憐塲上梅千樹、凍蕊粘枝瘦欲乾

十四日 〈月〉訪^二高谷龍洲、岡千仞^一携^二英国志^一贈岡氏 托高谷氏贈天道溯

原於大島圭助 至葉松石宅

看校 議幼稚学校事 買智□補一四錢

得^二岩村通俊書^一 Mr.Wolt 来、余不能接之故置書謝之

十五日 〈火〉看校 訪ホルド氏、不在家 麥氏至于校

暖氣催時身慣寒。旨甘不具却心安。看梅且曳鳩頭杖。遮莫門前雪未乾

十六日 〈水〉至明六社及ホルド氏宅 ○会前島氏宅、古川、津田、杉浦、

岸田、小松皆集

十七日 〈木〉朝艸藩祖盛烈記^② 看校、幼稚園諸書自文部至者到手 西

裨雜纂第二集刻成者自清水氏致 格公講道于講堂 渋谷氏来

湧幢小品二円 湖梅詩伝二円二方 宋学士文集二円

学中郎、与方鄭、司馬相如、董仲舒、楊雄、稽中敬集 以上諸書貸出

十八日 《金》往市買唐筆及^托作衣箱於一商而還

悉曇側闌二冊、於高橋店面購求

訓旨所建設立広告文二通、自繕写送之杉浦讓

十九日 麥氏來校 始看ピアノ至校 看校 講トマス モール家 作書答千

邨氏 作書約明早当至辻氏

「^マ二月十七日發ス 遠州城東郡下朝比奈村 柴田熊太郎 近村池新田郵

便ニ出ス

本年一月廿四日報知新聞ヲ云々

正院編纂

一 法例彙纂第一編民法部 「第一卷ヨリ第七卷至」

洋紙両面ブック

上製 定価壹円六拾錢

全 下製 全 壹円四拾錢

右之通ニ記し有之、右下製定価壹円四拾錢ノ分私購求イタシ度候ニ付御郵送被下度候得共、前金差送りハデハ郵送不被下候ハ、前金差送り可申候間御報知被下度候、可相成ハ此一封着次第右書御郵送可被下候、然ル上ハ定価引替ニ送金イタスベク候也

浜松県第三大区十二小区

明治九年二月十七日

城東下朝比奈村四百廿八番地

近村池新田郵便ニ發ス

柴田熊五郎 印

東京小石川江戸川町十七番地 中村正直殿

二十日 《日》看校 麥先生始教英學於女生徒七人

パアン婦、麥先生婦來 格氏講道於講堂樓

大野氏婦來 一吉談四十金貸於^ト氏之事於余 西坂氏淨写至、送一通於

瓮江氏

栗本鋤雲^見訪 ウルフ夫妻初上書室

二十一日 《月》仁孝天皇 休日 師校休業

続養蠶新論序^③ 見托 清水卯三郎見訪

閱市得文章正宗「二方半」 与木平、杉山、佐藤、八百吉至ウルフ家、談

教場事務

昨得葉氏書今日休業

《熊人力 神田錦町袋》

二十二日 《火》看校 日高同国片岡新來 日高次郎來飲酒告暫別

《水 二十三日 是日雪 西坂成一來》

二十四日 《木》看校 此日報知新聞載余文維新外論序^④ 関信三之事作

書以贈浜尾氏

○名物を食が無筆の道中記

二十五日 《葉 金》看校 至葉松石家 曉訪辻新次談幼稚園事 草徳川十

五代記序^⑤

二十六日 《土》関信三來見 八百吉偕木平、柴田觀梅于杉田邨泊焉 看校

會議「三時後」 文学会社会于五時

二十七日 看校 朝英學復習、米人^ト、麥氏夫妻、田中不二磨^ト其妻

來觀 格公來講道 午後至格公家

二十八日 看校 関新三始為読書教員 贈書於葉氏言其不能往受教 至分校

聴格公講ウエイランド修身學譚「自今日為始」

新奇万宝詩山二十冊、得一録八冊、自磯部屋携帰

《三月一日中村樓》

二十九日 看校 岸田吟香書來、道其助貧學校之意 根本正書來

〈三月二日 分校 修身学講〉

三月一日 会明六社 今年始与杉亨二相見 報知社招同諸友于両国中村樓

三月二日 看校 麥氏来 訪小野湖山翁於神田五軒町

〈三月三日 午時岩邸老人 麥嘉締卜青山開拓使花園ニ往クツモリ〉

三日 三女教員来道女校事 十時後岩邸英俊見訪 麥嘉締来共^歩至青山開拓

使花木園

四日 看校 与木村會計至文部省与田中、辻二氏相見

五日 看校 麥氏夫妻来于校 往格公家守聖餐礼 得栗本氏書 得目賀田氏

贈来相校三種書

六日 終日昏々在牀 得田中不二磨書

七日 看校 至日報社与岸田子相見 得焦氏筆乘

〈村松良肅ノ書ニ序ヲ加フルコト〉

八日 看校 大川書来道山尾工部大輔可否召事 小倉県高津柏樹始来見 礪

部屋示輕世全書便覽

誠忠諸葛公、大義克勤職、身後無餘財、英雄自本色

經歲在城郭、風塵□□□、清静出□境、時疑□□逢

九日 看校 至珊瑚閣 鶴井□露五雜俎購求^マ 嶋田源六来 評閱大槻磐翁

谷風伝

〈格公講ニニューテストメント〉

十日 校西洋列女伝 看校

十一日 遠藤達来^聞訓盲所建立官既許之 文学会社伊藤燕国始来说一段話

說、佐藤麟角說律法事及其親所經驗

〈贈以金千匹〉

十二日 格公来说聖教 西坂成一来訴小学□□之事 是日安息、女校生徒十

餘人来聴格公說經 午後二時至格公家

十三日 看校 于校会議、通学生之事 買蛾術堂集書箱二

是日評閱北沢氏有馬游記

十四日 是日大風倒^壞牆飛瓦

〈十五日 分校新築タテマへ 明六社 十六日中村樓〉

十五日 看校 新募生徒試験 是日分校建立 往礪部屋交一円二万^圓輕世金

書 越清水水卯三郎凡兩回、為西裨雜纂第二集事 高津某見訪 格公求借百

五十円応之

十六日 不赴明六社 看校 礪部屋示事物異名錄「一兩三分」 新募生徒試

驗 高谷龍洲 講道格公来

十七日 看校 試験畢 箕作秋坪、小幡、須田来于校 于校買風雨驗器 電

信器事論及 往觀分校新築場 得乾隆板十三經注疏七円半

十八日 看校 文学会社集 是夜三時火起于筋違、高橋氏免災

十九日 日曜日 パルソン来講道

二十日 看校 試験五女子□□之後者

二十一日 歩於淺草及墨堤 得堅瓠集価「価一圓四角式分式朱」

二十二日 看校 広瀬自慙来 訪麥氏家

二十三日 朝鮮事和祝日休業 看校

二十四日 看校 与フルベッキ、ビショップウイリアムス相見于女校、

議刊聖書事 西裨雜纂第二集刻成 原胤昭来 往天王寺見中島翠堂碑

二十五日 看校 至于瑞氏、高氏 納本西裨事成 文学会社集 伊東燕国来

高津氏来宿

〈二十六日午前十時 前島君宅会〉

〈二十八日三時ヨリ フルベッキ〉

二十六日 会前島氏宅、山尾庸三始入社

此日道遇小狗未馴携而帰家 有小簡 竹の内いんきよいぬ年四月十七日

あつかへ正にて

牧野義順来「三バン丁五十二ばんち」

二十七日 看校

二十八日 看校 午後三時至フルベツキ宅 原胤昭来

二十九日 看校 払曉至前嶋氏宅途逢杉浦氏 自前寫借孟德斯鳩帰 与柴田、

千村、横尾俱至津田縄店 聖經会

三十日 看校

三十一日

四月

一日 看校 三嶋毅、坂谷素「川田、重野」、湖山、応招皆至

〈三日午後当与中嶋翠堂至谷中〉

二日 看校 格公講道于本校堂「岡千仞、柴田氏、横尾、千村来読創世記」

三日 訪中寫翠堂氏共至谷中觀碑、遂至後樂園、高津柏樹、佐藤麟角偕焉

○午後於山城屋・佐兵衛購唐詩品彙 小林氏母来

四日 看校 至高橋氏店 自数日刊輕世金書之事始焉 北隣買地之事与大村

氏約定矣

小石川水道町四十一ばんち 長堀正興様

都留郡第六区元下□田村瑞穂村ヨリ 尾嶋真公

五日 看校

六日 看校 午後カクラン公講聖書 フルベツキウイルリアムス来 夕至

坂谷素宅、与三嶋氏、鷺津氏相見

七日 看校

八日 看校

九日 日曜日 格公与牧師 来 至幸福安全社 与柴千横会于津田縄店

十日 看校 山田俊蔵以徳川十五代記見贈

十一日 看校 沢田治実来訪 続養蚕新論稿来

〈十二日前島氏宅集会〉

十二日 看校 会前島氏宅常員無欠 養育所分合論、訓盲社決於独立

十三日 看校 至広瀬自慙宅 テレグラフ器械整頓告成

十四日 訪河田氏宅、還金五十円「正月二月」分于 徳川殿 至赤坂邸、

晤湯浅氏言欲恩借四五百金之事

サインス

&

バイブル

50
Lives of
Poets

1, 00
Horn's Intro
duction

1, 75
Own of the
Gospels?

2, 75
Schaff
History of
the Church 3

5, 00

〈十五日新売東隣宅買看守人〉

十五日

十六日

十七日

十八日

十九日 赴九鬼隆一招

二十日 至文部省見田中文部大輔

二十一日 辻新次来談会計事

二十二日 不赴校

是日由藤川三溪購歷朝要記百五十冊価百三十八円、又購陶画一価二十円、
購東涯幅於桜墩翁価三円 是日伊藤燕国來說津田近江守助直事 岡本監輔

岡本 原岡松 藤川 那珂 藤野来談謙

二十三日

二十四日 曉接手古谷簡一碑

阿兄父發自真情。一片碑過六位榮。日魯紛紜何所定。堅牢莫若此佳城。

二十五日 看校 是日校逢広瀬尔慤 岡田源三郎母見訪

二十六日 看校 借磁石器械於校

証

立志編

一金貳百拾九円三拾七錢五厘

百三拾部

立直段壹部二付貳円八拾壹錢貳厘五毛

但定価六掛ケ 壹部二付壹円六拾八錢七厘五毛

右之通御座候也

明治九年四月

同人社

二十七日 不赴校 木平氏至赤坂、受五百金帛

二十八日 曉至津田仙宅、俱至ホールド宅議訓盲事、定議于津氏之地築一字、

実可喜也

五月

六日 赴前島氏宅 文学会社 燕国来_{其角}

七日 至津田宅与柴田、横尾、高津、千村読聖經

八日 〈五月〉歴朝要記一冊不見

九日 南摩綱紀見訪

十一日 歴朝要記送至自藤川三溪

十一日 看校 至葉松石家喫龍川茶、三円贈松石

題 双鯉_(六)

欲

画工紛々漫摸擬。此翁意匠独由己。一幅盈々春水煖。内中游泳有双鯉。

洋々圍々得所哉。

並行 悠揚波不起。对之半日_順忘機。回顧人世烟塵耳。濠梁樂趣豈難求。

胡不往從_庄惠乎

画工紛々漫摸擬。此翁意匠独由己。一幅盈々春水煖。内中游泳有双鯉。

洋々圍々得所哉。並行悠揚波不起。对之半日頓忘機。回顧人世烟塵耳。濠梁樂趣豈難求。

胡不往從_庄惠乎。

十二日 高谷龍洲書來贈其蠡管刻一部

十三日 看校 麥先生講窮理學是為始日 朝起草狭山茶場碑_(一) 文学会社

如例 至分校

十五日 天馬來

〈二十二日書籍館小集〉

十六日 看校 一株有生源

十七日 看校 栗本氏、藤川氏來 赴フルベツキ宅

十八日

十九日

廿日 分校開業式 大寫氏携重野書來

廿一日 格公來說教如常 高橋六藏來 使佐藤氏代_口得所書画會

廿二日 看校

〈廿二日書籍館小集〉

廿三日 書籍館小集「師範學校長」

佐藤槐之詩

營築書樓住水灣。登臨晨夕可銷閑。禽聲上下田疇外。帆影去來洲渚間。半

□紅粧霜後樹。猶餘翠黛雪前山。□□何乎受請福。占此風光又解□。新居

偶成

新居偶成 立軒槐草

六月

十一日 至格公宅有晚餐礼 午後

十二日 訪河田氏不在家、至赤坂徳川侯家、与侯及河田相見 是日魚什二於

テ藤堂老公招余及磐翁

十六日 至岩村氏家至浅草

十七日 会伊達自得、岩村英俊於楼上、葉松石来筆談頗盛

廿一日 女校婦人集会

廿五日 朝至大槻磐翁 昼過堀切觀葛藤 拉八百吉、金十郎、木平愛二、前

田氏至焉

〈廿三日 午後大鳥氏二赴ムクト〉

〈廿七日 二時ヨリ六時〉

廿七日 朝至堀之内熊野十二社 築地南小田原町三丁目拾番地基督教会堂小

川義綏、櫛部衛 朝至堀之内

〈廿九日 当至藤堂邸〉

廿八日 看校

〈三十日午後一時半築地百六番女学校試験被招〉

〈三日大臣参議当至女子師範学校〉

廿九日 至分校 看校 夕至藤堂家

三十日 看校 九鬼来校 看有所共議

寂々 簾幔。黄梅雨未晴。霏霏多病客。昏睡懶詩情。緑蔭 蔽池 暗。

榴花照 池邸。乱蛙何所適。 尽日 停 忙中閑有味。 金員姑時輕

〈八日洋々社一時至四時〉

七月一日 看校 婦人相率至甫利吉利

松曉至森有礼宅 不至明六社 文学会社如常

二日 日曜日 余講書 至分校、読聖經、社友来会

三日 三条公、伊東、寺島觀女校

四日 〈十七日第三回月曜 昌平館小集〉

五日

六日 本願寺瑩光上人見招因往焉、逢成島柳北

七日

八日

九日 兄一吉往津田氏宅

廿二日

廿三日 日曜 至格公家 訪栗津高明

廿四日 〈朝至赤坂〉赴柳北君招于葉研堀河合樓、葉松石別筵也 次磐溪

先生韵

心ト東遊必再回。分明此別不須哀。況有郵船 来陸続。 每開書信笑顏開。

ギユリツキ与フルベツキ見訪

廿九日 杉浦讓為其同僚村田大丞求其父翁謙齋八十八寿詩

吾歛高寿者、必有所由然、接物必忠厚、教兒能哲賢、賀詩滿綺席、佳日開

□延、五福皆完備、如翁何羨仙

八月一日 晚格公見訪、彼曰明早將遊富岡

二日 始定講日於二七之日 gentlenessヲ講ズ 遊王子村浴滝川

三日 購明史価三十円

四日 朝信夫氏来贈以五円托以書写事 訪重野氏不在 南摩氏寧書屋

〈六日八時ヨリ小松彰宅会〉

交誼元由天性生。桑韓自古久同盟。現今両使通和好。聞昔六師翻旌、

碧眼紅毛朋 或敵。黒瞳漆髮弟常兄。小儒攘臂諸君後。漫鼓詩腸唱太平 8

題扇面⁹

愛敬詩成本偶然、何知扇面有人鐫、携持応遍追涼地、披払尤宜避暑天、薰
浴清風君子德、謳歌聖世太平年、西京美俗吾能卜、聞把斯篇戸々伝

〈初学文範 憑虚泛論 作文之心得〉

廿六日 信夫至

廿七日 接葉松石自京師書

九月

八日 女子師範学校婦人集会

十一日 購国朝先生事略

十三日 曉往珊瑚閣請高浜大人至高田

此日兩約事成 渡辺一郎見訪、言欲用大石秀実於外国学校之意 待価堂来

拉保科某

〈十四日〉

盆池¹⁰

天光雲影一川虚、不道風烟改有餘、別貯盆池三寸水、鯉懷鵬意看遊魚

東自如
小大洪織興格舒

昨日草宮川保全幾何新論序

至分校、看二宅即イベイ求賃居者

賃格蘭金四十円、即暫以樂善社会金借用、以故札換新者、斎藤純孝姑貸与

余

十五日 曉草吾乘四載集序¹¹ 看校

今日高田田園旧主当¹²將家屋田圃一併交付而搬載遷移我輩代住其家、以雨太

甚独一吉往 本日

自国立第一銀行送来樂善社托金約書一通「本実与写」即転致小松家

十六日 曉草幼学信札序¹³

東京府士族利政母 石川美¹⁴「□□日四十二 五ヶ月」 牛込横寺町四十一

ばんち

〈維摩一宝万 縁虚客有 屈翁盤有 魚詩意因 知入術妙 閑談時所 費

分疏〉

〈十六日明六社〉

〈十七日日曜〉

〈十八日第三月曜 当至書籍館小集〉

二十三日 大槻磐翁書至訂約

十月三十一日 草支那史略題辭¹⁵

十一月一日 看校 裁縫師手伝二人命職議決

〈玉海〉

十一月

三日 招磐翁於高園

四日 上野謁文恭公廟 聴琵琶

五日 古詩源初草記自磐翁贈至

六日 選松樹可贈磐翁者

七日 望月氏来与往高園

十一日 福住順賀来聴琵琶

十二日 格公再始于同人社講聖經

〈十三日午後女校婦人集会〉

十三日 女校婦人集会

十四日 詣津田氏、杉亨二、小室信夫、伊達自得、信夫燦

看校 至松野嗣家

十五日

小室信夫

十六日 〈至高園〉 幼稚園始開業

既使天加大、更添山幾稜、落葉何須恨、風光有折增

落葉¹⁵

不妨冉々鬢霜侵、窓下灯前書味長、妄念有時擣空隙、一時輻輳去來今

夜

窓¹⁶

十七日 證

一金七円五十錢也

宗文選

八拾八錢八冊

竹口通卷

五冊

白眉故事

六冊

右代価正請取申候也

明治九年十一月十七日

大橋操吉

同津田仙至東京府及内務省、見楠本、杉浦、前島氏

晚作贈信夫燦詩五古

十八日 看校 文学会社

十九日 至分校 是日イベイ聖書開業 訪杉孫七郎 鮫寫尚信見訪会余不在

贈信夫燦^{*16}

敲門童子答、迎吾^肅禮敬。感化主人風、婦見睦嫻性。^々崢嶸回向院、香火

日夕盛。僧侶渾^{塵俗}、誰能持戒行。^{何蓬蓬}蓬居、有人貞且硬。牢落皇甫

湜、未過裴中令。^{空谷}比佳人、曾未^逢問聘。^{足維鶴翅}志將展、驥足^氣

已^横。薑桂老愈辣、松菊露益勁。信夫君恕軒、一見交輒定。^{改賴}良友、

整容須明鏡。樂取人為善、大舜所以聖。^{虛懷}共獲益、客氣肯競勝。^{屢見}誦

示 其文辭、光焰照百乘。^{誤為}識途馬、飯以斧斤柄。^{達意為}正宗、聲牙^鋤

逆境。^{忠厚尚}二南、淫哇^嫌早衛鄭。^{自笑論}空高、字僅識名姓。^{喜君}澹声利、

冰玉陶中清。砭々老耽書、誰以傲兀病。^{旧友}多輕肥、世人事奔競。門巷

独肅条、一室筆硯淨。^{芝蘭}隱幽谷、香氣滿林亘。石鏡鳴深巖、鏗鏘山谷

応。^{當知}霜雪後、春風吹福慶。肉食^{避賢路}、書生操邦政。^鳥得不預聽、

豈可独耽閑。^{聽哉陶清郎}居易以俟命。^{不疑樂天}

敲門童子答、迎吾肅禮敬。感化主人風、婦見睦嫻性。崢嶸回向院、香火日夕盛。

僧侶渾塵俗、誰能持戒行。何似蓬華居、有人貞且硬。牢落皇甫湜、未過裴中令。

空谷比佳人、曾未逢問聘。鶴翅志將展、驥足氣已横。薑桂老愈辣、松菊露益勁。

信夫君恕軒、一見交輒定。改行賴良友、整容須明鏡。樂取人為善、大舜所以聖。

虛懷共獲益、客氣肯競勝。屢誦其文辭、光焰照百乘。誤為識途馬、飯以斧斤柄。

達意為正宗、聲牙鋤逆境。忠厚尚二南、淫哇嫌衛鄭。自笑論空高、字僅識名姓。

喜君澹声利、冰玉陶中清。砭々老耽書、誰以傲兀病。旧友多輕肥、世人事奔競。

門巷独肅条、一室筆硯淨。芝蘭隱幽谷、香氣滿林亘。石鏡鳴深巖、鏗鏘山谷応。

當知霜雪後、春風吹福慶。肉食避賢路、書生操邦政。豈可独耽閑、鳥得不預聽。

聽矣哲人言、居易以俟命。

二十日 書籍館小集

二十一日 榎本^口義初來

二十二日

二十四日 訪山尾、鮫島氏 川田氏小集

二十五日

二十六日 〈日曜日〉日曜 格公來 抵麥嘉締家^口逢薛乃郎

野菊

風吹雨裏倍精神。朶々黃花個々真。嘆^口能添郊野色。芬芳^施與真成人

盤溪先生倒押宮虹作瀧川詩做疊奉呈¹⁷

健筆縱橫吐彩虹、嗜洋愛古郎愈工、庭前松猷千年寿、霜後^口楓輪兩頰紅、

久矣大名施異域、允哉末學慕高風、幸余見待如親眷、許入先生偃息宮

十二月一日 至明六社 富田鉄之助送別

仙台人

新井常之進

在アメリカ從ハリス先生而学

二日 大槻磐翁書至 山寺請評棚橋大作詩、評成即達于棚橋氏

廿三日 会于寺田氏于三河屋、寺田氏留別 湖山、成島、毅軒会焉

廿四日 午後至高田村別墅、揮毫

廿五日 草静節書屋記¹⁸

廿六日 四時会于山尾庸三氏宅、議立社後事

廿七日 払曉至津田仙家、謀建杭事、至赤坂紀尾井町訓盲地所

廿八日 是日八百吉、於高、行婚礼

余樹標于麴町訓盲地所了 至カクラン宅

二十九日 托高橋甲次郎買石

三十日 イベイ来送書四冊、会余不在

寛大

〇目鹿疏 寛疏

疏目麻〇易入蚊

叢林叢草沼易生蚊溝濁掃除何能掃

得〇〇節 爽〇高厚 〇〇累 不務間者学〇因

善美正大光昭純懿

謙受 忠恕 回己所欲施諸人

〈純嘏〉

天下之義理無窮、人之見識有限

〈頓進〉

聞譽則憂、聞諫則善 善積德新

勿恃汝智而聽天命

修身而天下報「史記一ノ三」

瀛奎「二十 林花ルイ二十才」此詩对雪遥相憶

送客逢春可自由

注(1)「奉呈玉舟先生。仍用先生韻」(『敬宇詩集』中卷載録)。

(2)「潘祖盛烈記」は、「潘祖盛烈記叙」のこと。西坂衷編『潘祖盛烈記』は西坂成一蔵版「明治九年七月刻成」のち、『敬宇文集』卷五載録。

(3)「統養齋新論序」(『同人社文学雑誌』第一号(明治9年7月8日)、のち『敬宇文集』卷五載録)か。

(4)「維新外論序」(『郵便報知新聞』第九一六号(明治9年2月24日)、のち『敬宇文集』卷五載録)。

(5)「徳川十五代序」(山田俊蔵『徳川十五代記』明治9年3月25日出版、のち『敬宇文集』八載録)か。

(6)「題菊池容斎雙鯉図」(『敬宇詩集』中卷載録)。

(7)「重建狭山茶場碑記」(『同人社文学雑誌』第二号(明治9年7月22日)、のち『敬宇文集』卷十二載録)か。

(8)『朝野新聞』第八九八号(明治9年8月26日)掲載。

(9)「題扇面」(『敬宇詩集』中卷載録)。

(10)参考「盆池」(『敬宇詩集』中卷載録)。

(11)「序」(竹添進一郎『棧雲峽日記』下巻、明治12年3月出版)、「吾乗四載集跋」(『同人社文学雑誌』第八号(明治9年12月23日)、のち『敬宇文集』卷六載録)か。

(12)「信札幼学序」(李春山『信札幼学』明治9年11月新刻、『敬宇文集』卷六載録)か。

(13)「支那史略題辭」(『敬宇詩集』中卷載録)か。

(14)「落葉」(『敬宇詩集』中卷載録)。

(15)「夜窓」(『敬宇詩集』中卷載録)。

(16)「贈信夫燦」(『敬宇詩集』中卷載録)。

(17)「盤溪先生倒押宮虹作滝川詩。傲聲奉呈」(『敬宇詩集』中卷載録)。

(18)「静郎書屋記」(『敬宇文集』卷二載録)か。

明治十五年日乘 十六年一月迄

二月廿四日夜八時前参星ヲ見ル

四書 輪講

三

左傳 質問

三

詩文 一時間「文三篇、詩五首」 四「表紙裏」

明治十五年一月一日

快晴

二日 快晴

三日 快晴 拜年至仙駄ヶ谷及近所皆投名紙

張斯桂、龜谷氏、高島嘉右衛門父子、秋月氏来

晚得林包明賀箋 神田区猿樂町一丁目五番地

四日 拜年至三島、加藤、北白川宮、福岡、井上、西郷等家 大久保一翁君来

○作初学文編序

五日 鈴木弥兵衛来、話及矢田部強一求婦之事

鶴岡老人携其子来 丁野遠預来、談及陽明学 峯源次郎来

作春蘭詩

水乃上に氷も見へす木の枝に風もそよかぬ乃とかなる哉

六日 細雨

毛刊十七史 史記ノ始メ序文一丁ウ 及築箭方興同人聞風而起鉅公淵匠不

惜玄晏

周礼。晋書。唐書。毛詩。五代史。周易。尚書。後周書。孟子。梁

書 公羊伝。宋書。隋書。魏書。南齊書。穀梁伝。儀礼。論語。南齊書

左伝。北齊書。礼記。北史。爾雅。南史。史記。前。后漢書。三

国志

史記集解序 是非相質真偽舛雜

譬嘽星之繼朝陽飛塵之集華嶽

〔陽明要書年譜一ノ六丁ヲ〕

王陽明丙辰会試。為忌者所抑。同人含有以不第為氏者。先生慰之曰。世以

不得第為氏。吾以下不得第動心為氏

初学文編序(1)

雖然羅列和漢古今矣。而整々乎皆短篇小章也。其雜。以識事理。其整。以

窺文法。譬猶挿五色之花於一瓶。其色香可以概天下矣 壬午一月四日

峯源次郎自千早城址獲春蘭一莖歸索余詩(2)

金剛之山聳寥廓。千早之城擁溪壑。遺址于今猶歷々。幾人到此不淚落。

池水湛々旱不涸。瑩徹可鑑清可酌。傍有春蘭之叢生。風吹幽香滿崖谷。峯

子好遠游。忠烈探遺跡。採得一莖帰。珍重比宝玉。吁嗟古今代謝去無痕。

富貴烜赫如浮雲。獨有一門萃忠義。永与蘭花留清芬。

書二十一史卷首*

余生于天保壬辰五月壬申、至今明治壬午一月、閱四十九歲七个月矣、人

生不夭殤、而踰少壯、得至于此、豈非天幸哉、今後所獲歲月、則猶是剩殘

之物、其長短多少、任其適然而已、生平嗜史学、因欲說尽二十一史、依順

序、自史記為始、以所為之事多、不能肆力于此、但以每日一次開卷、執朱

筆、為定課、不知不知書 先予寿而竟予、予寿先書 而終乎、

所惜心於其間焉、徐觀其孰先焉見 觀行 孰先焉、日暮途遠唯知行而不已

生不可前知者多矣、豈獨是哉 途遠予則不能倒行而逆施之也

余生于天保壬辰五月壬申、至今明治壬午一月、閱四十九歲七个月矣、人生不

殤、而踰少壯、得至于此、豈非天幸哉、今後所獲歲月、則猶是剝殘之物、其長短多少、任其適然而已、生平嗜史學、因欲說盡二十一史、依順序、自史記為始、以所為之事多、不能肆力于此、但以每日一次開卷、執筆、為定課、予不知書先壽而竟乎、予壽先書而終乎、行見孰先焉

七日 是日近午天晴日出 丹長女來請余莅其私立明倫學校、期以一月十日後三時、蓋開校之日云 向山黃邨來 会于明六社

記鶴岡翁事*

鶴岡翁、名新八、信濃国伊奈郡人、住東京神田通新石町、使_レ其妻壳_二煮豆_一、以為_レ活、而已則為訟師、旅于四方、其立志、以扶弱救冤枉為事、富豪之家、以非理托之、千金不応也、嘗罹篤疾、自分_レ死、其曾_レ受_レ翁_レ恩者_レ請名_レ松本蘭疇、療_レ之、遂_レ醫其藥餌、以致_レ殷富_一、翁今年七十、健強、面_レ渥_一、体肥、一家有_三四夫妻、天倫之樂、熙々如春、所謂陰德陽報者耶、余因翁之事、益信人之致福運、必有其_レ由_レ自_レ非偶然也

鶴岡翁、名新八、信濃国伊奈郡人、住東京神田通新石町、使其妻壳煮豆、以活、而已則為訟師、旅于四方、其立志、以扶弱救冤枉為事、富豪之家、以非理托之、千金不応也、嘗罹篤疾、自分死、其曾受翁恩者請名松本蘭疇、療翁病得痊、遂醫其藥餌、以致殷富、翁今年七十、健強、面渥、体肥、一家有四夫妻、天倫之樂、熙々如春、所謂陰德陽報者耶、余因翁之事、益信人之致福運、必有其由非偶然也

昨年之暮得常山文集乃水府義公著也、惜欠七八二卷、適清水篤守君見過示之、君約余以往質之於水戸家或得完本補写可望也已

一月八日 早起書賀箋則寄于遠国者

越中魚津大町四十五番地

阿波和脩造

加賀金沢池田丁一番町二十七番地

浜岡義道

伊豆国伊東和田邨

佐久間利三郎

信州長野町榎堂八十七番寄留

滝沢助三郎

淡路国三原郡福良浦 平瀬与一郎

大坂堂島浜通三丁目二番地 遠藤達

同 北浜四丁目十六番地 相濟社 片桐正雄

京御幸町通二条南 塩沢貫一郎

越後国蒲原郡曾根村 多賀繁吉

○芹沢潜 ○小林伴七 ○児玉淳一郎 ○芳賀勝貞 ○新島襄 ○柴田弘

○松野礪 ○小野湖山父子 ○奥並健 ○乙骨 ○服部一三 ○衣笠 ○

南摩 ○成嶋 ○長松幹 ○内海 ○矢鳥作郎 ○佐々木本支 ○横尾

○坪井重道 ○島田 ○関義臣 ○松尾寿雄

勘解由小路資承神田錦町二丁目四番地 福沢諭吉 西村茂樹

八日 安息日 余至校堂。見生徒会集者。講話。令之聽。英人教師哈利法基

氏亦演小話、以天微雨□外來生徒來者不多、然堂無餘席、就席者不減百人

九日 曉出家訪秋月胤永出酒般款待甚殷 拜年至 中山義高家、投賀箋于山

岡氏至大学晤加藤、外山二氏婦 余病風早臥

十日 余中風寒。不能至大学。並丹長有約。不能至。

〔發箋〕渡辺信 岩田味三郎 井原良平 氏家晋 桜井知嘉 甫喜山景雄

那珂通世 佐藤正興

十一日 渡辺温所借于余之唐書一帙還至

岩村礪水翁見訪余、以_二石譜贈之、又以二部画書借之_一、メーソン見訪 中

島一書至

〔發箋〕内村良藏 葵伯昂 榎本武揚 籠手田安定 立花種恭 能勢栄

十二日

十三日 至大学〔今年為始〕 横浜トムソン氏來 中寫嵩書來云、岩代国岩

瀬郡須賀川橋本伝右衛門欲於其園中刻愛敬歌請余題字

八戸鈴木浪江書至曰、彼地要教員代渡辺村男者云々

十四日 揮愛敬歌題字 是日赴宮本氏招至紅葉館、會者支那・張二公使、黃參贊、井上馨、寺嶋宗則、淺田宗伯、榎本武揚、上野景範、塩田三郎、鄭永寧、花房義質及余與宮本氏也、聞重野安禪、巖谷修、向山黃邨、亦与此招各有疾病事故不來

十五日 至津田仙宅會其不在。本期在彼談話。移刻。或在彼酒食露僕夫。乃無此事。恐僕夫不堪。而至長坂。歇蕎麦店。過午後一時歸宅。此日三浦渡世平將向遠江而發「応岡田良一郎招也」請余揮毫為之作大字、曰懷與安美敗名。等。既而清水卯三郎來。以其所著言逆論見贈。

且曰僕得_余先生加評於其上。幸甚。不知於先生体面如何。余姑答之曰。行將謀之矣

十六日 英人トムソン如期來、余以所思語之彼忻然而歸 斯文會集會余赴之、托山本氏而直歸家、以恐失英人之期也

是日雜誌發兌、送何公使序在其卷首者也

十七日 大學課業終、至高田邸清水篤守君邸、所以答札君先日年賀至敝廬也、時日將午、酒食款待礼意甚殷、既而與篤守君同至湯島麟祥院保晃會、々々松本順、大島圭助、山口泉処等、會散而至上野梓

東照公廟及還家已点灯矣 是日天晴色殊美

十八日 朝飯罷至佐藤槐家、為還愛日樓文一冊也、其姉君亦出相見、余覺其顏容眼光與一齋先生相似、老後愈甚
過書肆得觀象図説而歸三十錢

〈買書〉

長梅外先生欲贈其集於清正副公使請余紹介

十九日 誦詩大雅皇矣篇 張滋昉來訪、出酒共酌頗有興、致晚秋山敏樹來

二十日 至大學、誦莊田子方、與有賀氏約明日彼來觀佩文齋書畫譜 是日修整書簡紙 為馬場榮馬書紙數葉馬場榮馬昨年卒業生徒也

早朝作書郵送山岡鐵太郎言秋山氏之事

二十一日 揮毫 有賀長雄來觀佩文齋書畫譜 一吉訪高嶋氏帰

二十二日〈安息日〉 為樂善會資金御寄附願郵印凡_五通 華頂宮、山階宮、

北白川宮、閑院宮、有栖川宮、東伏見宮、伏見宮 姓名為山尾庸三、前島密、中村正直、津田仙、大内青巒

午後鳥尾得庵來至今年始來也、始余以書贈之言 是日當來訪故踐其約也使人急邀岡本_口則彼不在東京矣 得庵與談、趣味無限日昃而帰 揮毫教帑

深沢録郎之書到木函一寄來曰、此密柑佃伊三郎所贈云海苔所寄來矣

二十三日 至躋壽社過吉川半七見新収書冊、曰去冬忍侯藏書価二千五百円彼

一舉買之云 山川善次郎與其友_マ來

孝子翼六冊購七十錢 為中島蒿揮毫

二十四日 至大學 誦生民詩

高橋君來云將過牧野氏 佐藤麟閣_マ來示以甲州都留郡巖村石炭山開坑目論見書 贈片箋於吉川半七曰欲觀唐才子詩

二十五日 朝早往山岡宮内少輔宅、託秋山敏樹事 彼答有容受者 安生順四

郎來 内村邦藏來 西村正吾來促余文

賀内村鱸香先生華甲初度₍₃₎

鱸香先生六十一、清德善行多可述、郎君遊學在東京、乞言將寿筵辰吉、常疑年纔踰弱冠、心志堅定語老矣、不処世間少年_徒、負才恃氣意驕逸、尤驚文章超等輩、才華煥發有氣骨、此豈無由而然耶、果知庭訓有自出、渥洼元

足神駿姿、豫章素具棟梁質、交游堪為砥礪資、紛華肯奪貞白節、我觀郎君

先生_{口口口} 望非小、其學_欲兼綜本末、忘知大器期晚成、衣錦榮帰志可達、

□他日其必及見之、吾復得欣然執筆、先生百歲我九十、上堂極歡或有日

二十六日(○) 宮路助三郎來談種々事、余感其於識見 小田中氏所托某僧

碑文、余欲以^來月中成之

接岡田良一郎書、曰三浦氏着彼地英字勃然振興矣 接平岩愼保書、曰彼

安着甲州紅梅町四番地 接秋山敏樹書、曰今朝晤山岡氏云々

二十七日 至大學定課、竟為有賀氏誦王氏書面苑

二十八日 〈讌〉為秋山、岡沢二氏揮毫二十九日事也 是日靜岡旧友會開于柳

橋、龜清樓、晤榎本、塚本、福地、大鳥、津田等

二十九日 〈讌〉安息日 桜井忠德始開進德館、白井道澄始開嘉名算校、余

皆到焉 在館晤野村、加藤、池内等 在白井氏宅晤大倉喜八郎、余問其生

時年月日

天保八年八月二十四日朝

天保八年丁酉 困井山下火

己酉

己巳

戊辰□

三十日 〈讌〉弘曉起至信夫恕軒家、誘共遊龜井戸旧梅莊名主梅園及壩堤梅莊、

憩植半樓

〈蕉葉〉

三十一日 余微恙不赴大學 贈書于何張二公使、長梅外翁所托詩抄附送

來客為東京府吏長倉雄平、白井道澄、井上哲三郎

二月一日 〈飲酒〉明六社会余不赴 桜井氏乞余書字

校左氏誦本 下野国塩谷弘入于塾。矢板武之所紹介也「保晃會員」 王黍園

來出其旬六游篇、乞余評之且序之

二日 尹致昊作修德館開校祝文乞余正之、受鮮人所贈扇頭以篆書者

終日雪霏々々

三日 至大學、讀徐無鬼篇 小崎弘道、岡本監輔來讀普拉答克「願以此為日

課」 接俞吉濬書得詩三首

四日 盲人下林若藏持松野禪書來

一吉往岸田^{（ツツ）}銀香宅 揮書教葉

筮得乾初爻變、余深省于此、蓋以一爻為一年則自後第五年飛龍也、以一爻

為三年則^{第十五}三年

至十五年飛龍也、要之前程猶遙遠矣可不勗乎、古人曰早知窮達有命恨不十年

讀書、信哉

五日 安息日 早起誦則陽篇

牧野次郎吉來為揮毫滿四十紙 答俞吉濬 讀普氏英雄伝

〈齋藤氏祖祭筵肴饋余飲酒〉

六日 朝風雨 是日夜會開于延遼館為松田知事所召、余辭以書不往

斯文會例会、余不赴 終日雨不已

七日 至大學、与有賀氏誦徐無鬼及則陽 接井川作輔書

八日 朝起作野崎君碑銘⁽⁴⁾ 増田充績來 広部氏來

佐田介石使河野氏來示觀光灯、以四円七十錢買之 ○伊豆平井村梶尾嘉十

郎來以其子在塾也

九日 〈讌〉艸康熙字典叙⁽⁵⁾、淨書之⁽⁶⁾送于福井氏 鳥尾來、□□歌ヲ示サ

ル

昨日重野氏以唐堂集一帙見還、至是全部完矣

十日 夜夢將覺未覺之頃見寿、善堂、三字、余近節飲酒所以願老而少費易於過活也、常深恐得寿而多辱、今若寿而善則何幸如之哉

至大学、課畢至勝安房宅出詩數首見示□□、歸則秋月胤永來談其出處之事、共斟酌飲。村山木郎來判事。細井齋省來。淺田宗伯以書來求改其文二篇。

《午讌是夜小酌》

十一日 接張副使書、中有贈長梅外題詞。即送達梅外家。

水平讓乞余書許之 佐藤麟閣來

《是夜小酌》

十二日 往珊瑚閣校左氏說本

篠田氏來以金二円授之「与前此三次所授金（十円二次七円一次）合為二十九

円」

《寄張魯生》

昨接

大篇寄長梅外者。諷誦數其詞華秀拔。自不必言。臨歸帆將挂之際。以

僕所贖請。忝被許諾。深謝厚惠。且欽忠恕待人之盛意。梅外之喜出望外。僕

亦覺有顏面矣。理当踵府門拜謝姑略其礼以小贖代之伏祈寬恕

《寄何公使》

昨得長梅外書。并其所写

大人閣下書讀寄三洲者。審以僕所請

見允矣。行來至乎脂車有行色之際。領此大惠。僕平生蒙厚眷於閣

下者。益得以昭業於梅外父子之間。僕之榮幸。莫大焉。謹呈少牋。以道胸

中感謝之意。伏祈 昭鑒。并候文安。

贈立志篇一部於鳥尾中将 周易折中二冊還至

十三日 晴少有風

某氏於余如何筮得坤六四爻、先是招飲某公西歸 筮得大畜九二爻 今日筮某

公使何如恰与之同亦奇矣

十四日 以微恙。不至大学並女子師範學校。盖今日有卒業式。余見招。故以書謝不往。高橋千一君來。向井嘉一郎自西京歸至。以麦酒扇見贈。

早朝秋月氏請借三國志。贈書簡答之曰。宜自渡部温家借之。

十五日 脩道館史記刻全成送来。福井有賀銳次郎來寓余家。歸愚詩抄十冊、

高橋示之問我以其倆位出家所藏較之似是異本

情史自高橋示來、是夜閱之

学士会院余會焉、大鳥氏演儉約論

十六日 雨 為松崎文造揮毫 柴田達之允、以千村氏書來請題千村修身書

十七日 至大学、外物 高橋千一君來エンサイコロ、ヂアチエンバア十

冊以二十円完与之

静志居詩話、趙清猷公集、懷風藻、日東通曆購得之 鹿兒島伊東 來請

招教員於其私學校

十八日 訪高津柏樹會其不在、其婦相見托之以樂善會寄納金二十円 山田榮造

來

日印千万紙、舟車輪四方、欲令普天下、戸々薰書香

十九日《雨水正中》 安息日 高谷龍洲來訪 及川静來語之以既交付寄附金之

事 矢田部強一郎所贈之炭二十俵來着。

一吉為神津氏所招看梅 三十三本詩經正解「三円二十錢」、以少微通鑑

「価二円五十錢」及七十錢換之

二十日《雨水二》 為柴田達之允書修身書題詞（6）

我聞修身本。心意要誠正。又聞富強本。在于端品行。澆俗趨智術。惜不

天命。故人著此書。感慨豈有聲。

今日三時後黃遵憲留別至上野八百善、會者向山、小野、森、大沼、宮島、宮

本鉅鹿「蒲生、龜谷」

得重野、宮寫等書 廿六日将会中村楼

二十一日〔雨水三〕 至大学 山田榮造来 秋田氏示山陽評八家文 近藤浜及

其姉諏訪来 得藤堂老侯書、曰以廿五日開賀筵請余至其席 木平氏以同人招

德川從三位公〔紙〕票牌示余

二十二日〔雨水四〕 午後会石川良信君葬于谷中天王寺

偶成〔一〕

青天淨如拭、初日照簾櫳、物々含春意、玄々觀妙工、梅花開的皪、

老眼破

朦朧、忽欲呼藜杖、温暖更無風

〔戊酉初三刻中〕 十三畢 戌 十五參 亥 十七 鬼 四星

二十三日 至待価堂、天文大成管窺輯要価二円也

齋藤和内来以談經〔書名〕見還、且示其所謄写之本、可謂勉学矣 買荀子

箋积八冊、価一円也

松崎文造来曰、明日将発此地帰北越

二十四日〔雨水六日目〕 甲午 曉六時見星 房心尾

至大学、見加藤弘之共談課業事、因定莊子誦畢則当以書經代之、詩經之後

則当以老子代之

為有賀氏揮毫 六時觀北

ウルサエマヨル 斗

夜八時前觀參星

二十五日 午後三時赴藤堂老公賀七秩筵于中村楼、重野、川田、巖谷、日下

部、湖山、春濤、枕山等皆会焉、酒肴極美、音楽盛陳、加之風日清煦為罕

有之盛事

○奉賀藤堂老公七秩寿〔一〕

寄

麗日和風盛宴張。幸忝末席喜難忘。江涵嶽影春波綠。客發醉吟雅興長。人

醉吟 歎声

爵貴兼天爵貴。文星光併寿星光。豈惟侯伯無其比。翰墨林中亦擅場

二十六日 加藤桜老来 午後至中村楼即府下貴紳送清公使別設宴也 会者凡七

十余名 是日太田忠七来

〔始晤黎庶昌、楊守敬〕

二十七日 高橋翁来曰、愛媛県愛媛會社以書問来、西洋品行論千部価幾何

蓋因

即作之答以贈之、不知日後如何或有好報云 是日有賀銳太郎赴福井

二十八日 不至大学 誦談天 木平氏来談云招筵之事 輿說輟矣□□□銀云

夜星不見

三月

一日 篠田氏来、応其請付以二円五十錢 夜星不見

二日 岩代国須賀川村橋本伝右衛門寄綿来即作答書 入浴

岩村礪水翁問余以田道事、檢大日本史写伝付郵

昨日 岩手県紫波郡々山駅中村熊太郎所送之絹二張至、因書二律今朝付郵

入浴

〔上欄外図〕

三日 微恙不至大学 野崎円一碑文付郵便

○静〔以下破損〕

向〔以下破損〕

得二三革〔以下破損〕

上六君子豹〔以下破損〕

四日 訪井上君〔以下破損〕

五日 昨日〔以下破損〕

六四由縁大有得勿疑朋盍簪

文字重々喜声名漸々高推誠逢知己提挈出塵埃

至珊瑚閣付以左氏稿冊、過森野松五郎以養蘇鉄法見伝、曰若生意衰則当以

酒一杯澆之

宮本鶯谷与原要義塾主人 来



六日 加藤桜老嘗約余來臨礪川神社祭礼因到余到彼會、小野湖山在焉、拜

孔夫子画像、顧虎頭画甚好菓子料贈以參円

晚清水篤守君來、常山文集七八（欠本）寫見贈、又托五六欠本他清水曰他

日當寫贈余云□隴望□願亦得之矣

妻兒往本所 八百吉集會至木邨氏宅

礪川神社則祠

大日靈尊并文宣王者桜老所為亦仏家合祀神仏之故智也

七日 往龜谷氏宅借橘窓茶話三冊寫本一冊 ○過珊瑚閣舖〔破損〕

八日 旬內之事〔破損〕 果

安在箴之得三三天沢履之三三天水訟初九素履往无咎〔素來由正道務実吉浮

囂獨守常行理他人莫動搖〕

宮川幸広來、為高橋鏐君揮筆

福井源二郎〔書林〕因崑々堂贈サケ魚三尾洋菓一器

易占実有 明神之告示深可敬 余昨年來屢箴之自恐近于其□洗矣、自今當深

戒焉、必不得已而後箴之而已矣

九日 午後 秋月胤永与其友 偕來款話、出酒肴及日斜而散

十日 至大學始読書經 為同人社 箴之得臨上六爻變

十一日 此日樂善會訓盲院春季集會、両国報知社開業集會、余微痾皆不至

十二日 安息日 南摩綱紀宅廻評會、余以病不至

校左氏誦本于高橋氏楼上

寿三田氏太母三首

九十七齡天下稀、三春花草映慈□、兒郎今年六十六、猶□朱

一家肥処一村肥、九十七齡天下稀、仙鶴靈龜何足比、四方爭觀此祥穢

玉水清玲魚蟹肥、風光相對可忘□、
都如渥赭腰肢健、
顏容如齒腰肢健、
九十七齡天下稀

十三日 品行論 可刪如左 立志編 可刪如左

一冊 五十八章

五 八

〃 十

〃 十一

拾 廿二

十一 八

十一 九

〃 十

〃 四十一

〃 四十三

一編 二

〃 九

〃 十二

三 全ク削ル 三全章

四 二十一章

五 十一章

十一 十七章

十三 二十一章

以上文部省改正當削、今次因愛媛県官請以所刪之、書遂將公布於諸県

我今歲以新曆算之。即四十九年九箇月也。〔二月マデ〕我自謂過如此生涯。

実可謂大幸矣。餘何望之有。願脱卸百務。退守蓬華。為最可耳。但憂此事

甚難為也。

退一步 行 安樂法道三箇好善歛縁

十四日 是夜喫家製蕎麦 至大學、以意寡歛惊輟講而帰家

十五日 以意鬱々不欲在入會坐中、故今日學士会院以書微恙未痊不赴焉

○難遣中年以後情聴 五時湯屋〔隆慶橋〕焚

十六日 岡田長保來 入浴 高橋泰山君來〔上欄外図〕

〔三〕為江戸政記序 是日高嶋嘉衛門至珊瑚閣

十七日 至谷干城宅謝其使人來 至大學、会木場貞長來 末岡 至独逸

早朝以為人宜剛毅進往勿怠惰濡染、箴之得井之坎、日井渫不食為我心惻可用

汲王明並受其福



十八日 岩村礪水贈鴨并海苔 ○到堀之内 ○外山捨八來 ○鶴老來揮毫

中山義高病足、秀英舍試驗未了云

至夜外山正一來、以其詩示余且乞評語

十九日 為松平太郎君書 艸家屋建築会社末段送之于彼宅 八百吉偕木平、千賀

往觀劇

余不免愧恨不能自克頗苦之此毛病後有除去之日乎否、筮之得離之豐、乃与

高鷲氏筮佐賀乱時得之同、上九、曰王用出征有嘉折○首獲非其醜无咎、余

謂膽怯生愧者余敵也、当以出征之法奮進而除之、如此則心自剛、內得主而其

敵可得而抑也、因知此病可得除去也

內村邦藏來請入我社学英書、余嘉許之以明早復來当知確荅 是日終日小雨

二十日 平山省齋來為中山從五位入門 內村邦藏來入社 齋重野成齋書來 高

橋老太來

內田弥兵衛來謝余序文贈麥酒五罇

〈是日午後四時余在新樓聞生徒在食堂喧噪之声〉

二十一日 余学北京語後來有大有用处乎否、不甚緊要于余乎、筮之得至支那乎

否、若有至有用則願得吉卦、当于断易判之、得中孚初爻動曰虞吉有他不燕

今年壬午為千葉院殿三十年忌、中道院殿二十三年忌、本月二十八日為其忌辰

因以今日行祭典、招朋友親戚之近者饗之、來客為高橋泰山、双堂、岡田〔長

保〕、宮川〔幸広〕、齋藤〔純孝〕、木平、柳沢、佐藤

〈借金九円于篠田氏将帰国〉

二十二日 〈四〉 艸王漆園旬六游篇豆州紀游詩序 ⑨、即日寄致之

寄王漆園書*

相馬於伯樂之前發矢於養由基之圃予知其聘貽而不能進也、

貴国之文物天下

莫尚焉、以僕之不文妄擬 先生大著作之序視此二者、其僭越為更甚焉、是

其訂以把筆躊躇臨文逡巡而至于今日也、然而謬受尊托既諾而不果則罪又大

矣、進退兩難

真不知手足之所措焉、拙文別書呈覽自知万無万一有可

采則請幸賜慈斧書

不盡言愧悚弗已、正直盟手再拜

相馬於伯樂之前發矢於由基之圃予知其聘貽而不能進也、以僕之不文妄擬 先

大著之序視此二者、其僭越為更甚焉、是其訂以把筆躊躇臨文逡巡而至于今日

也、然而謬受尊托既諾而不果則罪又大矣、進退兩難真不知手足之所措焉、拙

文別書呈覽万一有可采則請幸賜慈斧書不盡言愧悚弗已、正直盟手再拜

此報答即請文安

二十三日 至珊瑚閣校左伝 高橋泰山來

二十四日 大学、試験文題「読某氏經濟論」及「漢邦西洋哲学所以異

大意

如何」試人有賀長雄、山田一郎、天野氏、高田早苗也 是日室長兼教員田

邊氏退社、為前日乱噪事故也

二十五日 〈五〉 午後至珊瑚閣校左伝 為西山正吾艸文一篇

二十六日 日曜日 艸蓑毛大孺人之碑文 ⑩

曉喚辻本氏与語「使其無与徒党結連」

〈二十七日三時ヨリ斯文会臨時集議〉

二十七日 朝松村精一郎來訪、以游眺奇賞序見促

至相馬永胤家今年始到也、兒肥大善以手促物 上野泰二郎來

九三貫如濡如永貞吉〔門庭多喜慶潤色更增色待到蛇迎虎金皆姓字香〕

是日吾妻兵治為外務省所召 厘月給六十円判任取扱

〈二十八日大内青巒有約當來〉

二十八日 大内青巒來言其請碑文之事

岩村礪水來 楊守敬來贈宋文粹、明文衡、何晏論語集解、清白士集

二十九日 往楊守敬之所、其所贈婦氏評史記王氏談文等書拉之而歸

午後三木屋來言橫濱生糸之事

遣价達試驗文評點於大學

〔上欄外図〕

三十日 坂本蕙墅、葵川信近來

三十一日 訪中島翠堂病、喉中腫氣息甚難、謂危在旦夕、以余至喜甚、交数

語

四月一日 明六社余謝病不至 鳥尾得庵來揮毫

書碑文与別府源一郎 内田五観歿、共議贈金若干

四月二日 〔日曜日〕 赤松則良君來請其長子入我塾 棚橋氏子在大学者來

西坂成一來請揮毫即応其求授之

水月禪師令兄七十寿筵作詩奉賀〔1〕

禪師擲紫衣、辛苦救孩兒、陰德有陽報、令兄举寿卮、發程從七十、享福至
期頤、天道如明鏡、昭然無可疑

棚橋君令尊八十八寿辰作詩奉賀〔2〕

八十又八歳、稟氣固靈根、想像見風采、賢良羨子孫、家庭知有訓、樹立別
成門、須識天倫樂、難將離合論

神津氏來贈予以式拾五円書碑文也

中寫翠堂訃音至、日昨一日午後九時歿

〔六〕 舛游眺奇賞序〔13〕

四月三日 〔月〕 高津柏樹來請余閱其脩身〔至高橋氏家〕

林元甫來請余書牘与勝氏為乞書愛敬歌篆額〔時大野太衛在座〕

四月四日 〔火〕 八百吉弔中島氏送葬至天王寺

四月五日 〔水〕 至福羽美静家

高橋翁來 星野瑤玖麻來揮毫 晚龜谷氏來

〔上欄外図〕



有賀銳一郎至自越前 篠田來將歸國

〔七〕 錦窠翁壽筵記序〔14〕

丈夫為志 窮當益堅老當益壯是伏波將軍馬援之言也、馬援征交趾時年六十二、
衝冒毒氣克平南方此啗口能言之而能躬踐之矣、余常誦此語以為士之志學者
亦當以神勇奮往直前觸冒艱難蔑視老死焉耳、雖然余少於馬援出征時十余歲
不知後來未果能是乎否、不為徒言乎否、去年之冬伊藤錦窠翁過予閑談移晷、
翁慨然曰吾父以九十二齡終明年吾八十矣、吾嘗建議於學士会院欲遣人於漢
韓研究本艸學設呵叱子有意乘桴乎、吾其此風浪矣、嗚呼是其神勇矣、
將軍何以異哉、翁嗜本草學夙顯名于海外年愈老愈篤篤於以見其學術之広深
与翁之寿均不可得而測也、今茲壬午四月十六日其門人謀陳列動植礦物等為
翁侑寿觴編其目錄、請余題一言、蓋翁之老而益壯余心儀之久矣、詩所謂君
子是則是傲者非翁而誰、余何得不欣然執筆乎樂適執筆而序之乎

四月六日 林元甫來 中島翠翁初七日逮夜見招婦代余往 為那須千洲揮毫

四月七日 往珊瑚閣校左傳

〔上欄外図〕

〔5天山 6震 7兌初〕

四月八日 晚臨蘇帖

誰歟救我者 叫呼向一世 喝向一世 適矣救濟



米社記〔八〕

我邦所產。以米為第一。而百物之価。隨時低昂。皆以米為準。米商之盛。
有由然者矣。維新已後凡百事業。立会社。設良規。以謀便益。於是乎米社
亦興。其向旺盛。有如旭日之升者。夫米者邦人生命所關焉。而年之豐凶則
繫乎天矣。雖然天人理一。善惡之応。有如影響。故使邦人品行善風俗善乎。
米穀豐登。貨財蕃殖。可必也。諺云謀事在人。成事在天。抑米吾願米社之

不独恃智謀之末。而必当忠善信矣。以待天之成事。
而不衰矣。頃米社某价白井咏齋君請余記于是于書
其□□□果然。則可□能保其盛

四月九日 躋寿社贈書于余使今日臨其會「於紅葉館」余謝不往

汝々吟
□汝吟 * (15)

誰歟救我者。叫呼向世人。貿々然遠求望。汝惑亦甚焉。救汝者無他。不外
乎汝身。貴汝忠信。富汝儉勤。壽汝養。顯汝智仁。此皆汝自主。

顯汝在行仁
汝慈

不在他人權

誰歟救我者。叫呼向世人。貿々遠求望。汝惑亦甚焉。救汝者無他。不外乎汝
身。

貴汝忠信。富汝儉勤。壽汝養。顯汝智仁。此皆汝自主。不在他人權

四月十日 婦偕齋藤氏婦往森元家、且訪松本萩江謀矢田部氏之婦也 是日栽

桜八株綠樹八株於門内校室前後

四月十一日 遊墨堤、桜花正爛漫、偕遊者婦女及齋藤氏之妻也 是夜足音在

屋上使人探之逃去 朝至大学、夏課此日為始

四月十二日 与八百古誦「スリフト」

發旧書簡得洋人書牘

四月十三日

和漢千首
□絕句序 (九)

余不能作二十八字詩、雖偶作之、不免有痕迹、求其神韻悠然妙在酸鹹
未有一也、今崎山子編此集余詩亦見採焉、讀之頗覺吾意因欲以他作換之、

遍搜簾底而未得也、白樂天有句曰才大嫌小詩非嫌也、憚其難也安得起、樂

天於九原而質之

反復窮論誰使吐其寃矣

四月十四日 至大学、講皐陶謨 今日文学臨時會余演叙引

四月十五日 東京學士會院、余病頭風不赴會

○成瀬大域以詩見贈因次其韻

不求形似只求真、遠溯鍾王筆有神、辛苦多年窮秘訣、一朝容易肯伝心

十六日 至本伝寺議三八碑之事 搜市得東璧玉山周南等入家 文集八家類選 関

根義富來、偶外出不見

十七日 至保晃會 岩村礪水來 田島弥兵衛來 真木重遠來

十八日 微恙不至大学

合刻詠歸餘事客棧雜詩序 (16)

唱詠歸餘事者。南無阿弥陀仏之余韻也。客棧雜詩者。南無妙法蓮花經之雜

聲也。夫山河草木悉皆成仏。一色一香。無非中道。麤塵言細語。皆歸第

一義。則登覽之際。觸景生情。衝口成章。何一非讚仏唱經之轉化者哉。默

雷清今二上人以詩作仏事。膠漆相投。固在于此。彼二宗相軋者。又何足言

十九日 属艸茂木君之碑 (17)

二十日 坂本蕙墅來示其書帖三冊 関根義富携其子始見 大久保一翁君來言

黒田氏

欲買麹町分校之地、余答曰此非僕權請君 当与勝氏謀

二十一日 得大内氏書曰所有豐扇許壳与他人

Mr.P.Mayer

I got the answer of O-uchi, the director of [Raku] Kun-mô-in. He /who/ said that

/the/ many fans for deaf are made in the institution at Thukijp san chôme no. 15 (橋

端) 二丁目十五。 There are superior [class/ or interior classes of fans; the prices

differing from 2 yens to 1 yen. If you go there, you can chose & get it.

The address of American selling place. He will enquire & inform me, as

soon as He finds & I shall send it /.../ whenever I get it

二十二日 作進徳館記 (18) 脩道館板通鑑序 鳥尾氏兼任調査院長

二十三日 日曜日 安生順四郎書至招余上野某別荘、謝不往支那人二名、鷺津、

栗本、大河内、谷干城、当来云々

二十四日 宮川保全来

〔作避寒學吟序〕

〔上欄外図〕

十二年正月廿四日子時生八十六歿

○梁川蛻巖 寛文 傷官壬子□長生

壬寅 □胎財官印月令甲丙□

辛未衰

印綏丙子長生

□ 壬寅 比十 初二十 側 印三十 官 戊戌 丁酉

官四十 丙申 八才 財五十 食 癸巳 比 壬辰 辛卯

初七十 庚寅 倒 乙丑 印八十 □ 丁亥 丙戌

〔作避寒學吟序〕

是日有賀說三郎發京赴岐阜

二十五日 花房義質寄書于余、日明日赴任云々

尹公閣下

明日花房公使將發都因付□一書但時日甚迫無由□□不過書數行耳

令息念梧君入學弊社以來□無疾病等事故 身體健全品行端正學日本語及書文章

駸々日進、近來又始學英國語言文字專心於此、僕知他日為貴國大用者、念

梧君也 僕樂見之矣 □樂得英才而教育 幸勿為意書不盡言□候文安

是日余不赴大學

評日薩師詩 作避寒學吟艸序（19）、為何札之

（一陽来）

二十六日 小原重哉来

婦携三於高 至高島嘉右衛門神奈川別墅、午後二時發三時半汽車四時當達

高橋姑来宿

二十七日 茂木君碑文再乞正於鷺津氏者至

二十八日 雨 至大學読皐陶謨

鐵、高、帰自高島氏 上九睽孤深中膏旨

二十九日 至本伝寺、見三八君碑落成 寺僧為友人乞余書諾而帰

是日韓客尹致吳帰省發都

三十日 多揮毫

関根義富来為揮毫共喫午飯 庭前新緑与躑躅花相開景光尤艶

宮島誠一郎氏来、彼言五月四日將招余々諾之 借宮島氏以陳簡齋集

村井宮之来、此人託言道隆權現而來于静岡、得人見寧書来言悔前非之意

五月一日「庚子」 无妄變 三 无妄之疾勿藥有喜

余以為當務読経勿厭復誦費時

高橋泰山来 川上素六郎来

二日 至大學始讀老子

訪重野氏「看足利学校本数種」

三日 為保晃会作紹介書 内藤恕海来

松村賢一「愛媛松山中学校」 山川省「鹿兒島新聞社」

小出雅雄 高崎五六「岡山」

十文字信助「広島」 中川横太郎「岡山」

長谷川為伸「長門国厚狭郡千崎村五十七番地」 本山彦一「兵庫」

岸鼎「岡山」 治部謙「岡山」

梅本幾太郎「大分」 境二郎「島根」

平瀬与一郎「淡路国」 近藤美「和哥山」

四日 作修道館資治通鑑序（20） 至珊瑚閣「觀見漢書評林」

〔上欄外図〕

〔上欄外図〕

五日 至大学「始于第十室、読禹貢」 信夫祭贈赤飯至
是日四時半文学会講談会、余為一小話係書須成誦之事

六日〈立夏〉 木内左織来付之以大郷学橋建碑金三円 揮毫 辻新次弟来
水道町庖物町 太田屋 豊太郎「二月十一日□旧曆正月四日」

傷官壬午病
食劫癸卯絶

辛卯

印綬戊子長生

傷 食劫 財 偏才 官
壬寅 癸卯 甲辰 乙巳 丙午

官三十 印三五 倒食四十 劫□□ 比肩五十
丁未 戊申 乙酉 庚戌 辛亥

傷五五 食六十 才六五 へん才七十
壬子 癸丑 庚寅 乙卯

七日 好晴 坂谷氏之子来請評其先人文選

〔上欄外図〕



八日 高鋭一来示其製 小田長太郎入学

九日 至大学 得岩村礫水書

小学修身幼訓題言

〔児〕童猶空器、清水亦受濁水亦受、為父師者其可不以善言満之乎
〔誠実〕

学士会院〔破損〕

五月九日 加藤弘之

中村――

福沢――

十日 読ハミルトン心理書 篠田氏来借金一円去

十一日 奥野昌綱来 中島一、加藤祖一来 蒲原平岡氏来

San Francisco Chinese Consulate U.S.A

十二日 入庫読書 有井範平来 広文堂携書数種来示 読天一坊話書

十三日 入庫読書 岡本監輔来 志賀雷山来

十四日 用力英書 家人六三无攸遂在中饋貞吉

用力作文 僕九三勞謙君子有終吉

十五日 学士会院、余往会焉

大有四爻変

十六日 有賀氏有病、以此余不至大学 午後往内田九一氏取像、関根氏偕焉
敬宇先生閣下久不晤謁甚比経

文祺佳勝 為□□□於曆貴二十日午後三時於弊館喫以華餐、致請

大駕来此一叙在座者重野成斎根本通明諸位也、同事姚君子梁景仰文学□列

各生人恕不以冒味見拒此上即請

文安不荘

姚文棟 仝物訂
楊守敬

楊先生 姚先生 大人閣下久儒渴仰忽得

華牘 尊翰 辱陽曆二十日午後三時招宴僕□□使僕得陪坐領教情意之厚 感謝高招
該日幸無□□事必当拝趣謹此奉益併候文安不宣

十七日

十八日

十九日 至大学

鳥尾君与岡本君偶会于余宅、出酒閑談頗適

二十日 好晴 前嶋密君見訪談及教員之事

風地觀初爻変

赴支那揚子招

赴楊守敬、姚文棟招宴、会者小野湖山、重野、岡千仞、亀谷、巖谷、日下

部、根本等也

二十一日

二十二日

二十三日 至大学

二十四日 題蘭亭圖⁽²¹⁾ 成瀬大域来

名文不入昭明選。真蹟遂入昭陵中。由來至宝不湮滅。光焰万丈吐長虹。

石榻流伝麗不億。举世重之如華嵩。況有好事作画圖。興入毫素爭神工。

崇山峻嶺眼前現。流觴曲水欽高風。我对茲圖有所感。典午當年事夢々。

唾壺麈尾^{輕名教}。莊老糟粕醉三公。右軍^{似是}獨醒人。慷慨憂時^{却似}溢心胸。

呵斥清談為妄作。一觴一咏^{異凡庸}。君不見天下稱絕。技^{名者必有出平技}。

二十五日 哭大郷清郷 中村増三来

児時猶記信氣翁。皓首龍眉道氣充。祖孫三世今^{皆迹}。知得人間万事真

有井範平来 至本伝寺、住持病塞不見

二十六日 至大学 伊訓大甲講 斎藤純孝囑以某医寿蔵碑 島惟精子在塾者来

見

二十七日 至馬場吉人家

寄題嶺松山華岳院*⁽²²⁾

嶺松山枕海門濤。曾展先墳薦野蒿。寺歷新^修觀復美。村留^旧友歲皆高、

森茫千里鯨魚吼。寥廓半空鵬鳥翔。何日卜隣茲地老^{吸塵}。吞^吐風騷^一。

嶺松山枕海門濤。曾展先墳薦野蒿。寺歷新宮觀復美。村留旧友歲皆高、

森茫千里鯨魚吼。寥廓半空鵬鳥翔。何日卜隣茲地老。吸嘘万象逞一心

一伊勢国度会郡山田河寄町四百五十番地

大島孝助、下井嘉平、吉田新八 書ヲ出ス

一越後國中頸城郡潟梯浜村 渡部八郎 徳蔵事

小牘拜稟仕候、近々御出立之御由御多忙奉察候、陳者一樣^{御身此度者一}

入御勉強之御事と奉存候、就而者當時御入塾之場所敝社迄咫尺之間に有之

□御座候、届一樣之御義ニ付而者願不申義□□恐入候ニ付て此後とて万

小生方江御出被成候と申スに事寄せ或ハ□□江御交り被成、或ハ旧友□宅

江御出被成候事より不都合も生じ候而者敝社□□も甚以当惑仕候義ニ付□□敝社御

懇意の朋友も可有之、相互に来往致し候而者御勉強の障と可相成ニ付、閉

戸読書之義を御勸メ申上度義ニ御座候、万一小生に御用も御座候節ハ加藤

様御面会御引受人より之御添書を以て御出可被下候、左も無之節ハ小生も

御面会不仕と致し候方可宜と奉存候、右申上度如斯御座候 草々頓首

加藤祖一樣

夜得佐藤鱗角書

二十八日 至小石川植物園

二十九日 至大学、読盤庚孝子 至浅艸書肆

三十日 至大学、読盤庚孝子 訪秋月胤永家、不在

三十一日 内藤氏叟来 十五年六月一日 不至明六社 高嶋嘉右衛門見訪

二日 至大学 秋月胤永見訪

三日 夜佐藤鱗角来

〈同人先号非而後笑大師克相遇〉

四日 日曜日 書茂木君碑

五日

六日 至大学 買金鯉長二寸者二百八十尾放之於池 岡本監輔来示得菴文

七日 至広群鶴宅 夜鱗角来「日明早将往八王子宿一週七日間」

八日 艸角田与市墓銘⁽²³⁾

新聞雜誌字引題詞

没字漢終無用處。蠹書蟲得作飛仙。勸君少壯須勤學。莫到白頭嘆逝年。

九日 无妄上九肅然起敬 作書報大學是日養痾 為岡本氏作小学序⁽²⁴⁾、

价送致

十日 成瀬氏来 至谷中群鶴家 得朱軾文集

十一日 日曜日 岡本監輔来

十二日 得有賀氏書因病至卒業期休業 ○喰代豹藏来

十三日 信夫祭見訪、出其第二集文鈔見贈

十四日 雨 井上哲二郎来乞書 无妄九五此工夫不可不動

十五日 因病不至学士会院 婦妹六三不可不慎戒

十六日 高橋泰山来、買陽文正文集、陳定宇文集

篠田雲鳳与中村竹之進來

宇内立国大要序⁽²⁵⁾

立国於宇内、必有所以立者、非偶然也、吾邦有三種神器、曰明、曰武、曰信、君臣交孚上下同德、礼教由是而興、風俗由是而敦、此所以蔚然独表

于東海也、今立国于宇内者、林々矣、昔之所夷蜚視者、餘為文明之邦矣、

其亦無有所以立者而然耶、孔子曰、三人行、則必吾師焉、生于今日者、豈

啻三人行哉、他万邦之善不善、皆可以自鑒焉、葵川古心著是書、意亦在

于此、属余叙、古心性嗜學、務広異聞、近于明、喫緊為人、著書、不

倦近乎仁、論有根柢、事必徵實、近于信、盖人有此三者、可以卓然立于

世矣 十七日朝

欧米女權序 十七日⁽²⁵⁾

欧、吾不知也、如米則女德日進、女權日加矣、昔者女之美、正于容貌言語、

今者女之美、生于智識德行、此豈政治學術之所能致乎哉、蓋有大于此者

存焉、近者吾邦之人、近曰女權、曰民權、而能着眼于其大者、本者乎、古有神

功皇后、耀武海外、周有大妣、以胎教著於詩礼、邑姜以才列乱臣、*然則

亞細亞之女權 蓋亦尚矣 後哉 之先 十七日

之女權 蓋亦尚矣 百古成之

*然則亞細亞之女權豈在欧米後哉 十七日

十七日 大野大衛来曰、将赴横浜迎其父之至 湯目補隆来 際晚伊豆人井原

良平来

十八日 関根義富来贈金二十円麥酒三罇、報船山碑文⁽²⁷⁾及書之之劳也 橋

本綱常母没有報、故贈以金二円

十九日

二十日 贈書於服部一三言中村竹之進事

得榎本氏書将用秋山敏樹

《九二大車以載》

二十一日《夏至》 伊豆人下田新右工門来 四書大全 一 說編

二十二日 壬辰 寄附金二十五円保晃会

海江田信義来 大野氏大人着于江戸、以土産菓子見惠

二十三日

二十四日 保晃會員高野氏来「銀行收証ヲ以テ来」 書小学新論序使達于岡

本氏

二十五日 庄内熙請歷代靖献遺言序 大石秀実拉其友三島来、乞書及一書之

序

自由新聞第一号寄来板垣氏社長

二十六日 為高橋金十郎揮毫 百濟範真来

二十七日 高橋泰山来 麟角来 艸監獄則注釈序⁽²⁸⁾ 岡本監輔来示其宇内

立国大要序文

二十八日 鳥尾得菴君見來、延之於庫中 至珊瑚閣、暫借世說新語一部「七十五錢」 閱大学生徒試卷、作評点以价付送于大学

二十九日

莊原和 請借文選欣然許之（因呈以詩）
（莊原學士）
（余）

工善其事必利器。挾其精好親自備。美人愛鏡自照頻。豈其借（鏡）于他人。書家好硯好筆墨。傾囊亦必務買得。學者藏書亦似之。購求豈憚典新衣。余亦鄴架插三万。自誇三公不与換。為之百物皆節縮。食甘糟粕衣露軒。莊原學士世儒家。澹素好古厭（厭）紛華。奈何家無昭明選。恰似農人無犁鋤。幸我文選藏（藏）數部。可（使）令學士恣借取。嗚呼四癡何能免。不妨人視為外府。君不聞文選爛（爛）而秀才半。勿（莫）厭百回費吟玩。願君日々手此書。字畫漫漶紙斷爛。（廠）

至岩村礪水宅供待甚殷

三十日 加納久宜（學僕申込） 山田壽（太）郎持歎願書來

作東直之助墓表

代莊原學士解類

學者識時鍊才器、豈其失機不予備、須知風雲世變頻、作事由己不由人、西有魯英東有墨、互競富強務食得、我今開港皆交之、散髮脫刀效其衣、四海之外國有万、船舶成市貨交換、學問所何渥古多、旧就扼腕見其飢、西洋格物口名家、刻其蟹文口皆華、文迂八家尽數壳、買得口書代餓餓、從是新論著數部、刻成世人頗見取、君子豹變当改革、何冒拘執設城府、夢見先人夜數事、欣然慰意真可欽玩、善哉（子）學日々新、不為故帑抱斷爛

十五年七月一日 葵川信近、小原重哉來

七月二日 高橋姑來 篠田（44） 携麥酒來 庄門熙來

三日 月 山田寿太郎、山本忠輔來 加納氏（44） 來

四日

五日

六日 至珊瑚閣閱古今說海

七日 送寺田望南序（30）

余餞寺田望南於不忍池之長酹亭。于是兩次矣。一為明治九年十二月二十三日。天寒氣冽。陰雲慘淡。是時。望南將歸于鹿兒島之靜節書屋。余為之記以贈焉。其明年有西南之亂。人或曰。望南知有此事。故還其鄉也。或云不也。望南豈知有此乎哉。以余觀之。望南非可以區々者論也。望南所居之室又扁曰讀杜草堂。其飲杜也非一日矣。杜不云乎。許身一何愚竊比稷而契。又曰。讀書破万卷下筆序有神。夫望南之所志。豈不在此乎。則豈欲僥倖一博取功名者乎。望南年方壯。氣力方剛。以稷契立志。以讀書為事。自前年歸鄉之日。至于今未嘗異也。雖不幸而不能。于其鄉之靜節書屋。而其志未嘗有變也。此豈可不嘉尚乎。今茲明治十五年七月七日。望南將往西京。与同人再飲酒于此。是亭。樓台如画。垂楊泓水。而池上蓮花。有已開者。与昔日慘淡之景異矣。酒半酣。望南起。讀余言。余亦欲言而不能已也。嗚乎。自是以往。望南將暫斂跡于山寺。讀書于靜節讀杜之淨室。而他年必必有大酬其志者焉。不知余以衰退之齒可受見之乎否。可保類齡而見之乎否。

往上野八百善、心寺田之招也、黃村、成島、省軒等在焉

岩村礪水翁携夏菊三瓶見贈、会余不在 広群鶴來、以茂木君碑成也

八日 岩村礪水翁以鹿兒島菊花三盆見寄（31）

○菊花方夏擅芬芳、相对午窗幽興長、雖是天生詫異品、也由人巧發容光

○滿目芳香滿室薰、故人寄我意殷勤、還驚艷福真非分、聞道曾經獻

聖君

翁亦以土佐鮎見贈（32）

鯛魚^囊飯紫蘇衣、南海珍羞天下稀、笑我平生嫌醋味、对之便腹欲加围
晚秋月胤永来欲借金百円余商量規画有玉成之意

九日 往秋月氏宅持金交付之 関根義富来揮毫 秋山敏樹以酒某見貽 高橋泰
山来

送寺田望南⁽³³⁾

道本無不有、大小^兼洪纖、如空中有色、如円中有尖、道本公共物、不得^私
家^擲、諸子及百家、各有所^同、孔子取狂狷、未嘗為^忌嫌、况如浮屠教、
其何可攻砭、我^同窺其万一、文字堪飫厭、衆生期濟度、非必耽^寂恬、^古来
学仏者、宅^推蘇髯、忠義填骨髓、^恩沢被^政鱸鮎、我邦有泰時、無欲自治^嚴、
儉德以先衆、後世称其謙、仏何負^家、其未自有漸、若歷徵古今、詆者口
可箝、友人田望南、好学才力兼、今将往西京、僧房養幽潜、^世人或怪君、
将無狂病添、^我独知後事、昭然如著占、蟄龍三冬伏、忍默混蟲蟣、他年風
雨会、沛沢四野霑、南方有大鳥、不鳴三年淹、一鳴達九霄、驚愕万民瞻
「先少此者和尊作御宅示艱韵穩押感服仕候

作兼何如

道本無不有、大小含洪纖、如空中有色、如円中有尖、孔子取狂狷、未嘗為
忌嫌、况如浮屠教、其何可攻砭、我窺其万一、文字堪飫厭、忠義填骨髓、
恩恵及鱸鮎、仏何負^家、其未自有漸、若歷徵古今、詆者口可箝、我乃知
後事、昭然如著占、以下同俱妙

〈向山黄村曰〉〔朱、敬字加筆〕

出儒入仏洵属異事、非有奇拔英挺之筆、弁之終不免于物議、望南得是詩吐氣
矣、^(傍点生)

向黄妄批

近作一二首録呈、疾ヨリ斧正ヲ乞度ト□□候処也

御一評御痛刪可被下候 近日持趨 万□

七月十四日

榮五郎

敬字先生

梧石

十日 能瀬栄来云将往長野県

十一日 奥野昌綱来

〈是月中旬 与加藤桜老訪勝海舟〉

十二日 加藤桜老来 神津氏招余々意不清快謝不往 龜谷氏来以近刻書見贈

十三日 揮毫

十四日 讀書酒話 寺田望南来告別 秋月氏使人持蘇東坡書坐池廟碑石榻、

得黄村詩

十五日 摸石榻連昨日全摸畢 至珊瑚閣托天球事

十六日 鉄^高偕齋藤夫妻往觀劇 関根来告別 相馬夫妻来児亦偕焉

英人法利哈寡来告別将明日乘船「為三菱商社所聘也」 北条亮来曰在報告

社 坂谷次雄来

十七日 朝至両国島屋買天球二箇「一者一円、二者二円」

午後至訓盲院、大内青巒請退院衆不允

十八日 艸伊達春山公書後⁽³⁴⁾ 至岩村氏家

十九日 成角田墓銘稿郵寄于中村秋香 但□□碑文⁽³⁵⁾

二十日 買說文十三本与帰震川史記換也 得津田仙書

二十一日 有井範平来 山村良助来

二十二日 埼玉県官員橋詰敏来為加朱其文 作義士遺墨詩

二十三日 至高橋泰山家托以六円天球可得則欲得之也 大島仙藏来 得訓盲

院余被選改正案委員

〔日本・中国近海図、略〕

「途歴西京訪盲啞院、其景況、比之前度、一新面目、生徒之数、益至百八十餘名、頃盛受工業、啞則銅鍊金銀諸器、盲則以拾紙或手織席、或製果孟涼帽茶托之類、頗饒雅致、小子購一銅器來、他日昭□電覽請以此事語于大内青鸞或以此示彼則大善 ○明日青鸞或來余家、僕當預言之於彼」

西討四士碑

「明治十年九月二十四日、涌谷邑四士、殉王事于城山之役」^一是歲二月、鹿兒島逆徒困熊本鎮台、^二勢甚猛王師海陸、齊發征討之^三逆徒拋險拒戰、^四諸果徵兵^四面齊攻^五逆徒大敗、逃于大隅^四日向、奔于鹿兒島、殲于城山、夫平定之功、雖由^五廟算之得^五宜而徵兵亦与有力焉、初徵兵之命下、前県令宮城氏、令^六旧邑主亘理胤元、諭邑中子弟、応徵、以松浦保治、平塚義^七造、為首唱、召募五十余名、既^八及衆^九凱旋、四士不^十歸^十鄉人^八之情有不勝慨嘆者、於是松浦平塚二氏相謀、建碑^九於赤^九心^九猛^九雄^九命^九社傍、以表其忠、四子者木村軍記也、佐藤運藏^十、大越和右衛門也、遠藤常也、胤元介山村良助、請余^{十一}銘其辭曰

人有一死 均所不免 死而^{十二}得^{十二}所^{十二}莫^{十二}此^{十二}為^{十二}善^{十二}吁嗟四士^{十三}身^{十三}為^{十三}得^{十三}殯^{十三}赫々千載其名不泯

明治十五年七月

東京 中村正直

二百五十七字

狂文改正する事あるべし

駿河駿東郡東紅梅町六番地 村田幹三郎

〔日本・中国近海図、裏表紙に続く〕



〔裏表紙〕



注

(1) 「初学文編序」(鈴木重義『初学文編』一、明治15年3月5日出版。『同人社文学雑誌』第七二号、明治15年3月10日、のち『敬字文集』卷九載録)。

- (2) 「峯源次郎字千早城址獲春蘭一茎帰。索余詩」『敬字詩集』中巻載録。
- (3) 「賀内村鱸香先生華甲発度」『敬字詩集』中巻載録。
- (4) 「野崎君之碑」『同人社文学雑誌』第七二号（明治15年3月10日）、のち『敬字文集』巻十二載録）か。
- (5) 「序」（音訓康熙字典序、古川守衛編『音訓康熙字典』明治15年3月出版。出版人は福井源治郎。
- (6) 「題辭」（千村五郎『初学修身学』明治15年2月出版。出版人は柴田達之允。
- (7) 「偶成」『敬字詩集』中巻載録。
- (8) 「奉賀藤堂老公七秩寿」『敬字詩集』中巻載録。
- (9) 「旬六遊篇豆州紀游詩序」『同人社文学雑誌』第七四号（明治15年4月10日）、のち『敬字文集』巻十載録）か。
- (10) 「養毛太孺人之碑」『敬字文集』巻十一載録）か。
- (11) 「水月禪師令兄七十寿筵。作詩奉賀」『敬字詩集』中巻載録。
- (12) 「棚橋君令尊八十八寿辰。作詩奉賀」『敬字詩集』中巻載録。
- (13) 「游眺奇賞序」『敬字文集』巻十五載録）か。
- (14) 「錦窠翁臺筵記序」『同人社文学雑誌』第七一号（明治15年4月20日）、のち『敬字文集』巻九載録。
- (15) 「汝汝吟」『敬字詩集』中巻載録。
- (16) 「合刻詠帰餘事客棧雜詩序」（柳沢信大編『熱海唱和集』巻地（明治15年8月12日出版。『同人社文学雑誌』第八七号、明治15年12月1日、のち『敬字文集』巻十載録）。
- (17) 「茂木春太君之碑」『同人社文学雑誌』第七七号（明治15年5月20日）、のち『敬字文集』巻十所
- (18) 「進徳館記」（『同人社文学雑誌』第七六号（明治15年5月10日）、のち『敬字文集』巻十二載録）か。
- (19) 柳沢信大編『熱海唱和集』（明治一五年八月二日出版御届 収録の蠡舟居士（何礼之）「避寒吟草」の序文であろう。『同人社文学雑誌』第八七号（明治15年12月10日）にも「避寒学吟草序」が掲載されている。
- (20) 「修道館板資治通鑑序」（重野安禪校閱・岡千切点『資治通鑑』明治15年12月出版。『同人社文学雑誌』第七八号（明治15年6月10日）、のち『敬字文集』巻之八載録）。
- (21) 「題蘭亭図」『敬字詩集』中巻載録。
- (22) 「寄題嶺松山華岳院」（『同人社文学雑誌』第八二号（明治15年9月10日、『敬字詩集』中巻載録）。
- (23) 「角田桜岳墓銘」（『同人社文学雑誌』第八六号（明治15年11月20日）、のち『敬字文集』巻十載録）か。
- (24) 「小学新編序」（『同人社文学雑誌』第八三号（明治15年9月20日）、のち『敬字文集』巻八載録）か。
- (25) 「宇内立国大要序」（『同人社文学雑誌』第八二号（明治15年9月10日）、のち『敬字文集』巻九載録）。
- (26) 「欧米女権序」（湯目補隆『欧米女権』明治17年11月出版。
- (27) 「船山竹林墓銘」（『敬字文集』巻十載録）か。
- (28) 「監獄則注釈序」（『同人社文学雑誌』第八〇号（明治15年7月10日）、のち『敬字文集』巻九載録）か。
- (29) 「莊原和譜借文選。欣然許之。呈此詩」（『敬字詩集』中巻載録）。
- (30) 「送寺田望南序」（『同人社文学雑誌』第八一号、明治15年8月10日、のち『敬字文集』巻四載録）。
- (31) 「岩村礪水翁以鹿兒島菊花三盆見寄」（『敬字詩集』中巻載録）。
- (32) 「翁又以上佐鮓見贈」（『敬字詩集』中巻載録）。
- (33) 「送寺田望南」（『郵便報知新聞』第二八七二号文苑雅賞欄、明治15年9月5日、『同人社文学雑誌』八二号、明治15年9月10日、のち『敬字詩集』中巻載録）。
- (34) 「伊達春山公書後」（『敬字文集』巻十三載録）か。

明治十五年日乗

七月二十四日ヨリ十六年一月ニ至ル

從五位ノ人 百六十九人

十五年七月二十四日

二十五日 暑熱殊甚 伊致昊来

二十六日 為山村良助揮毫

二十七日 坂本蕙墅、亀田英来、将訪柳沢氏也

津田仙来「訓旨之事也」 山田寿三郎来「借式四円四十銭」 篠田来「明朝帰郷」

朝帰郷」

二十九日 古文前集装釘半成 植村氏以生姜見贈 渋谷啓藏以鯉節見贈 八

百吉往相馬永胤宅 弘曉往仙駄ヶ谷徳川公邸

三十日 向山黄村、平野一衛来 三十一日 篠田雲鳳来

八月一日 至桜老家

二日 清水殿来

三日 信夫氏来

四日 翻迷和尚来

五日 至島地黙雷家

六日 作髮繡浄土九品相図詩（一）

七日 木平氏為 徳川家所召受券書「六百円借券」被還者

八日 湯淺氏以□□□券見還 至是借債得□□□有不可言者

昨日 至岩村氏家以得英俊病歿之報也、云五日卒 為麟角揮毫

九日

十

十一日 鳥尾君来談、以王法論評見属

十二日

十三日 訓盲院委員會議

十四日 岩村礪水葬二会ス

十五日 訓盲院集會

1. 惡 諛者友情之毒也

2. 名 声之疵 其可 痊、者寡矣

3. 貞正之眼者 斥逐 淫邪之 視者之人

4. 守候之不慎 招 窺 致 嚴 細心 之敵

5. 怒 怠 二者妨善謀

6. 諂者可懼之敵也

7. 信友者猶堅 壘也

8. 豐富之 敗 許多之人 与 貧乏同

9. 拙工 与 其器具 無 相 爭

10. 石之 轉 動 者 不 集 聚 苔（移業者不成 事）

廿四日 大久保公来ル

廿五日 芹沢潜来ル

廿六日 外出 周易禪解、窮理通ヲ得タリ

廿七日

廿八日

廿九日

三十日 心田寺日惇来乞書 作寄小林日昇詩用古柏行韻 伊致昊来 其父無

恙明日当着于東京

三十一日 秋月子錫書來報其得⁴宮殿下之命受皇典講習所教授之任

九月一日 至珊瑚閣 得日昇師答書并其和韻 大久保公有使來還謙堂翁幅

堤正勝以其統蒙求見貽、及乞改其大鄉學橋先生墓碣銘

二日 朝与指原氏訪伊雄烈於山城軒 至林紀邸吊其歿〔破損〕黎也 笹山氏

来乞書 加藤桜老来 朝奥野氏来 中川一德来〔携津田氏及教則来〕

三日 為河合氏作其算術書題詞⁽²⁾

數為六芸一。幼学居最要。苟能通此技。便利多功效。日用錢穀務。錙銖可

計較。天上星宿遠。推步^{不難}到。但須始卑近。久之進奧突。先入自為主。

當慎幼時教。此書重實用。循々為善導。我知刻成後。広行于学校。

岡本監輔來贈小学新論一部 書教師館云々証書付之木平氏⁴〔持致千駄ヶ谷

邸

四日 高橋泰山来 伊東氏持英曆來購之〔二十錢〕

五日 天学姉妹 詩文晋 經義大有 洋学未済

九日 題詩經評釈⁽³⁾

人往々以三百篇。為遠隔千里。梅外先生適以為近在目前。以学詩^文訣。

懇々說

輒說^{示人}

何不自珍秘之甚也

世人往々以三百篇。為高遠不可攀。而梅先生則以為眼前^{方出}意中事。故其

說詩之^虫□□不啻^若如^如匡易來解人願世学詩□梁寬近于此

題書經評釈

詰屈声牙。周詰為最。今讀^{先生}梅^翁此書。便覺平坦無阻礙。何快如之

十日 吉田謙輔來 翻迷上人來 神津專一、湯目補隆來

Mr. Vencroza

Dear Sir

I introduce a Bondzu, the Japanese priest, who having a very curious valuable picture, wishes to show it, for knowing that you are fond of oriental curiosities & at the same time hoping to get your critics written with a few lines, if possible, longer whatever. This picture is not the thing to be sold.

He came from Kanshu, a part of Japanese western countries taking with him this curiosity and, running about [through] Tokio, he got introduction to any remount men high or low, [.., or yours] & desired to get their written intinations.

Please you take him into your room^{iscl}, & look the curiosity.

The [curiosity] picture was made by [Annen] Ku, a priest. It is said that he collected hairs of Eighteen [...] & six sausand^{iscl} people [...] picturing this great a [...] of paradise, consisting of nine decries.

Yours respecting

K. Nakamura

十一日 奥野氏、新島氏〔為揮毫〕伊雄烈、渥美氏〔与木平〕来

十二日 至榎本氏宅

送同氏赴北京⁽¹⁾

高秋持節赴燕京。身杖安危任豈輕。每見疾行無善步。須知淵默有雷声。

簡書事少公堂部。風月興多詩思清。將見同文同德合。四郊尽撤兩邦兵。

文部省前頭屢回先生御拾意悠哉 今朝往謁榎公使囑托龍山一件来

一 醫理之直者健 心力強腕力強

二 其心耐 禍患難 即極大之德也

三 能勝禍患即極高之榮也

四 音樂者憂愁之

五 懶惰者隨人於諂愚

六 我不以^寶物買^虛望

七 享用節則物久存

十五日 赴学士会院□□

十六日 日悼上人遣山村良藏来

十七日

十八日 読耐軒詩草* (5)

良齋題其首、許機軸許別出、磐翁跋其後、碧海喜鯨掣、其言不我欺、

開卷彩雲霽、伊人既仙去、二翁化異物、人世如無根蒂、万事随煙滅、

只有文字存、幽光發潜德、寄語後嗣者、万本要多搨、搨本期高德、万本多搨

*良齋題其首、機軸許別出、磐翁跋其後、碧海喜鯨掣、其言不我欺、開卷彩雲霽、伊人既仙去、二翁化異物、人世如無根蒂、万事随煙滅、只有文字存、幽光發潜德、寄語後嗣者、万本要多搨

十九日

二十二日 国東翻迷来 大学

コノ極楽ノ図ハ余ニ於テ甚タ珍トセリ、ソノ工妙ナルコトハ頂上ノ点ニ

達セリ、ソノ物料ヲ以テコレヲ作ルハ甚ダ為シ難キコトヲ能セリ

毛ヲ以テ色ヲ分ツハ甚工ナリ、

コノ物ハ持主之ヲ宝藏スルコト一方ナラザルベシ ヘネロザ髪續浄土図評

鳥尾得庵来談

二十三日 艸日本文人軌範序

好花不発於惡樹之枝。善言不出於惡人之口。盖物有本末。務其本而未従之。

柳公権論書曰。

心正則筆正。余亦論文曰。欲作絶好文章。当作絶好人物。試觀諸先生

之能文者皆其人皆高一世矣

赴紅葉館為送別開宴也、蓋ホールド氏將暫帰英国

二十四日

二十五日

二十六日 大学

二十七日 財満久純来 大藏經法花涅槃刻成見寄

二十八日 岩村通俊来、為謝其家君生平事

曉奥野昌綱来 使人取□文起

林研海氏家使人持マンデウ

馬可講義自横浜送来

○脩道館資治通鑑第一帙来以只一部来、□即遣之於斎藤純孝

二十九日 至大学 向山黄邨、大淵祐玄来

得^{△△}Chinese Proverb 診叢話^{△△}

十月 終日雨 読英書

十日

十一日

十二日

十三日 至大学 午後訓盲院委員會議

十四日 浄書安川寛三郎、西山松隠先生墓表、郵致之于各家

十五日 〈十五年十月〉城井国綱来 不至学士会院

十六日 鳥尾得庵来談 日晷上人来贈□海即身成仏□一卷 有賀説三郎罷、

贈白氏集

十七日 改山崎衡文送致

徳川公帰自英国

二十八日 日蓮上人御会式 松村虎吉来

三十日 金十郎来言八百吉之事

Dear Mr. Verbeck

Sir, I am very much obliged for you [...] lend me the book of almanac.
I shall call on you & thank your kindness, when I return the

book, [will... in a few days.]

十月三十一日 越後五十嵐来 不至大学因微恙故也

十一月一日

同 二日

三日 天長節 宮内省江不参届ヲ差出ス 一吉脳病ニ付相続之義ヲ隱居正直

ニ讓ル届書江調印ス

先月末ノ曉ニ一星ヲ南方「招魂社ノ少シ右ニ於テ」見ル即チ老人星ナリ、

コノ星ハ井宿圍ヨリ直南ニアタルナリ

《老人星》

四日 午后雨 奥野氏来ル、曆書ヲフルベツキ氏ニ還ス

五日 日曜日

六日

七日

十五日 学士会院出席

十一月十六日 八百吉出立赴アメリカ 往浅艸得儒函数類

十七日 赴大学 午後一時漢学規則之事ニ付会議ニ出ル

横浜海岸通り五丁目二十番地 蓬萊屋 中村一吉

是日下谷江ハガキヲヤル 神田錦町二丁目一番地宮山方ニ而高垣守正

月曜日、土曜日早朝ナレバ在宿之故申シヤル

十八日 訓盲院ニ往ク 石川千里来ル

此後惣会ヲ開ク

訓盲、二十二日水曜日之事

十九日 斯文会三年期演説ヲ被頼 ○鳥尾公看楓会 佐藤某、関根氏

二十日 高木寿頼へ往キ唐筆一枝ヲ買フ

二十一日 至大学 書賈持唐本日本外史来

二十二日 訓盲院集会、山尾、津田不来

二十三日

題古山淡香山林画卷(6)

山海擅雄勝、静遂愛園林。_似披輞川圖、_太快吾胸襟。古山性澹雅、

日涉興味深。長松_回溪風、_如奏太古音。小酌又閒咏、年光不覺侵

右五古一首、句各藏一字合成山静_似大古日長_如小年十字

二十四日 微恙不至大学 鳥尾居士来談 田島弥平来 百濟範真来

二十五日 艸田島弥兵衛墓銘(7)

二十六日 改諸葛碑文(8) _勝浦輅雄来

至清国公使館見姚文棟等、過楊思敬宅

二十七日 曉將起夏水一本木口頭唱出来 ○□処逢生_{○○○○}陽来復其可庶幾矣

二十八日 《十一月》至大学

二十九日 晚、秋月胤浩還金

三十日

十二月

一日 保晃会、二十五円携往交付該会「百元納完」 朝至大学 晚往三河屋

会明六社

二日 先月之末筮得乾四爻變又筮得五爻變、今筮得豐上爻變不可不夙夜儆戒

也

余自知褻瀆之罪不可不夙夜病艾也

三日 《日》

四日

五日 大学ニ至ル

六日

七日

八日

九日

十日 〈日〉茂木建碑 三島氏廻評会「於高、偕齊藤氏至女芝居」

十一日 斯文会、長醖亭皆往「竹添氏留別」「於鐵与高橋母往宮川氏、此十二日事」

十二日 〈十五年十二月〉至大学

送竹添井々赴朝鮮(9)

通經足大用、寄重視立品、君兼此二者、才美不容掩、三韓箕子国、文物多儀範、智識閎辺隅、不見泰西艦、古者我師彼、周孔受教諗、今者彼師我、外交革旧染、^行見国論定、暴徒息陵犯、我苟有忠信、何難今彼感、此行在睦隣、持重如韓范、寧^有無赫赫功、不被小豐撼、国家方新造、休養干戈歛、^有辺境幸無事、吾儕可高枕

十三日 曉見老人星

小学読本題詞

兒童之智、入于耳目。兒童之德、基于誦読。――

養其身体、飲食衣服。養于智徳、家庭教育。以至学校、師友或触。若忽在始、豈可不挾。此之所萃、無門無毒。和漢善訓、如金如玉。

十四日 〈十二月〉伊豆山田寿太郎因郵便還金四円四十銭

十五日 曉四時後翼中、彗星行、漸南光漸微在孤矢之東 夜觀參星是西南、丑刻

至学士会院 曉至大学、病不卒課而帰、訪勝安房示以神祖書、彼曰此書親所書也

十六日 〈十五年十二月〉

十七日 至大久保一翁君家「中嶋氏所還之金七円二分及羅池幅金十五円付内君而還」

仮名読西国立志編序

大倉喜八岸田吟香二氏、嘗向余陳感謝之意、謂其家道隆富致今日之盛、由于読西国立志編、有所感發興起養勤勉忍耐之氣象也、其他面謝者、或以書致謝者不為少、則此書之有益于世、可知矣。中村秋香氏、欲使婦女童幼易讀且易解、少加體括^可所謂先獲我心、但第十一篇以下最有裨益世道人心、余深望其刻之完成云

浅艸伝法院韶舜有書、曰佐田介石^有於本月十日没于越後高田

張沆來贈杜工部集十冊、其家藏書及其文楊紙

[... very gladly

I have your letter]

I have received your letter very gladly. I must utter my thanks for you with to have me as [your ...] one of your noble member of examinations. [Mr. Verbeck is one of my best friend, Mr. Ueyama^{sd} one of my most acquainted also. No better pleasure is than this invitation.]

But as I am now very busy & can not get out of my staying in Tokiyo at this season, so please excuse me, for not attending your examinations.

Although I cannot say sure, but in future I may attend your memorably^{sd} time, if opportunity allow me to take.

Yours respectfully.

「 It will give the principal & teachers of Ferris Seminary great pleasure to have Mr. Nakamura attend the Annual Japanese Examinations to be held in this school on Thursday & Friday the 21st & 22nd day of Dec. 1882 beginning at ten o'clock and to sit during there examination with Dr. Verback & Mr. Uyemura [植村正久——追記] as a member of the Board of Examiners.

#178 Bluff Very respectfully Yours

Yokohama

E.S. Booth, ...

Dec. 15th, 1882

十九日 〈十二月〉至大学 信夫榮来出酒飯饗之 戸塚文海見贈金十円チリメ
ン耄反

平岡晴次贈貝石 買絜齋集

二十日 至訓盲院 始見野村靖 一貳円五十銭 絜齋集

一貳円五十銭 寿美屋□會

一十銭 人力支度代

一貳円 フルベツキ

一五百文 ツキ地ニテ人力車

一貳円〔□笠亭〕 津田君江郵便ニテヤル

一貳十二銭 名士品評

一貳円 大鐵瓶

八十セシ 瓶□□二十セシ

一貳円 出ス 板木代

一十二セシ 人力車

廿七日

一七十銭 本修復 東浦

廿八日

一貳円 御てつニ渡ス

三十一日

一八十銭 時計直之代

一回出ス

十六年参月三日

七円

小林氏



一円

郵便ニクツス

五日

七円

大橋倉吉

ベ二十七円十四銭

二十一日 夜赴徳川公招筵、与会者外山、乙骨、河田也、与滝村、湯浅氏相見、彼周旋□□事

二十二日 至大学、交付試験表于教務掛 作花野女史碑文⁽¹⁰⁾

二十三日

二十四日 斎藤篤信、秋月胤永、向山黄村来

○毎日習字作百字。読背誦之書十葉可耳。読涉獵之書十葉可耳。但一部未完。不可換。〔曾國藩云〕

□□先者右申上奉り度如斯御座候也

二十五日 〈十二月〉午後三時至両國中村樓。蓋同人社親睦会生徒百余名会焉。旧友亦有来者。余与木平、柳沢氏对酌半餉而帰。余向生徒。演説芸業当与德行并進之論。曉。奥野昌綱来以其著見貽。余嘗書題辭者也⁽¹¹⁾

広部精、箕原貞明、室原至福来ルト聞ク

西曆曰金星自十日為曉星、余朝^{二十六日}曉得始見之

二十六日 〈十五年十二月〉艸ニ香雲閣詩鈔ノ序⁽¹²⁾ヲ即送ニ于郵書于向山黄

邨^一

元同人社生徒白井孝来三度 是日返金於尾張屋於是三千円之債還矣 使人

(虎吉) 于相馬氏 支那人書(張沆)ノ返書ヲ得ル

□来奉到

惠書□□

道体勝常慰如舛頌賢文中二句不是一番寒徹骨怎□梅花撲鼻香謹□示□呈其

書僕尚未究心故不能奉還伏惟

亮々肅復則敏

着安天寒惟珍撰不宜□再拜

二十七日 晴 今日不_レ可_レ不_レ往_二山尾氏招_一。渠曰欲与談樂善会将来之事

曉見金星及七星中

二十八日 評銀田鴨背詩稿送之 至福田屋買周易大全、価二四〇〇二十五錢

也

夜半過見參中曉見軫_河中

〔評曰、聞鴨背君明日將歸鄉急閱詩稿〕

驚犹神龍隱見於墨雲中評而点之僅獲其編中甲_二耳_一、大処長処不暇窺也

二十九日 至本伝寺 読経史百家雜抄 帰家信夫_氏標_〇積文則序送之

三十日 終日理簾底故人書簡殘昏

三十一日 中宵觀參中、曉觀軫中金星東_出

年来意氣詎能豪、身世浮沈奈不高、烏帽平欺新白髮、黄塵点汚旧青袍、憔悴添新白髮、塵埃徒_重深旧青袍、少時抗志慕虞夏、晚歲所成慙屈陶、頼有

故人不退棄。相逢一笑共醇醪 次韻向山黄村君_{〔13〕}

原詩

原詩

世上功名付俊豪、墙在老隱間弥高、素餐曾忝太食粟、思賜苟存前代袍、旧

稿意翻忘甲子、殘書細読〇陰陶、忍教白髮欺烏帽、旋摘黄花泛濁醪

明治十五年所得詩

春蘭詩七古 賀内村鱸香華甲初度七古 青天五律 奉寿藤堂老公七秩七律

寿三田氏太母七律三首 寓感十余首 寿水月禪師令兄七秩五律 寿棚橋氏令

尊八十八寿辰五律 汝々吟 題蘭亭図 寄題嶺松山華岳記 莊原請借文選

前後贈詩二首 送寺田望南 髮續浄土九品相詩 送榎本武揚之北京 読耐

軒詩艸 題古山淡香山林面卷 送竹添井々赴朝鮮 述懷次韵向山黄邸 觀

四義士遺墨 贈岡本多一

明治十五年所作文

初学文編序

旬六游篇豆州紀游詩序

米社記

詠帰餘事客棧雜詩序 避寒学_・唸_・艸序

進徳館記

欧米女権序

監獄則注釈序

送寺田望南序

詩経書経評釈引

西山松隱先生墓表

仮名読西国立志編序

香雲閣詩鈔序

論語論文序

田島弥平墓銘

立嘉度墓表

戸塚春山墓表

修道館板資治通鑑序

西討四士碑

游眺奇賞序〔文学雜誌二出ツル歟タゞシモノ〕

野崎円一碑文

錦窩翁臺筵記序

和漢千首絶句序

茂木春太碑文

宇内立国大要序

小学新編序

東直之助墓表

書伊達春山公書後

諸葛信澄碑文

安川寛三郎碑文

花野女史碑文

川路君之碑

漢訳文則序

角田桜岳墓銘

船山竹林墓銘

緑山堂文稿序

田中義廉墓表 逸

[I humbly ask you that you may not [leave] cease your teaching here, until our [society] company [invite] will get another foreign teacher, instead of you. As

[I] The above is not only my wish, but [my fr] all our companions have the same

feeling [as myself] so, [So] I hope you [allow] will consent to do so.
yours respectfully]

存按 十六年一月二十三日同人社教師トムソンニ贈ル写

18 Yedogawacho

Dō-jin-sha 23th January

A. G. Thompson

Sir

I humbly ask you that you will be kind enough to continue your teaching here in Dō-jin-sha, until our company can find another foreign teacher; instead of you.

The above is not only my wish, but all our companions have the same feelings, so I hope you will [consent] be good to [do so] consent it.

Yours respectfully

K. Nakamura

明治十六年癸二月一日

〈十六年一月〉

明治十六年癸未 余歲五十一歲七月也

一月一日 読通鑑魏紀十五六枚

余欲読儀礼頗難之縦不能精通亦期一経目其愈于束閣歟

曉見軫中角二星甚明、亢房若可見心中中央一星赤色煌々然矣

一月二日 〈十六年〉 曉起出門拜年所投刺、日中村秋香、日北白川宮、日福

岡孝悌、日井上馨、日西郷従道、日前島密、日宮島誠一郎、日加藤弘之、

日杉孫七郎、日島地黙雷

一月三日 曉見翼軫中。見西方地平上有一星正与東方地平上金星相對。蓋火

星也。

思今日将拜年者、日德川公、日何礼之、日勝氏、日山岡氏、日相

馬氏、日福羽氏、

日三島氏、日鳥尾氏、日南摩綱紀、日細川潤次郎、日玉乃氏

以上拜年之外。山尾氏、矢島作郎、桜井能監、岩村通俊、重野氏、大築尚

志、田邊太一「以上十七軒」投刺而還、適高島嘉右衛門

来 以洋画山水見貽、張滋昉来、朝仙金玉均与尹致昊来

出酒菓相勸皆大喜、金氏日本月十日当遣朴命和入学

一月四日 高津柏樹来以詩見示曰、不知才□□□親四海兄弟四海□從事復々

盲唾業□人々□說年新

年ことにくる春そとハ知らるれとわきて長閑に見ゆる曙

一月五日 読楚辞 揮毫 大久保一翁来 三田葆光帶醉来 為伊東本支作字

三田帰後よくよみて贈る

帰るをハ忘るゝまてにさかつきを君に勧めぬ事ぞ惜けれ

六日 読九歌 加藤桜老来 曉見軫中 少曇

七日 〈日曜〉天晴 書扇面送于茂木道一「長門賤ヲ

川勝氏ニオクル」

〔上欄外図〕

八日 大蔵經少乗律送来 教員議會 九時集生徒于講堂

九日 至大学「三宅氏病無課」 大学開漢学之後余所當為大約如左

詩文点削四時間

一時間「文三篇、詩五首」

曉見翼軫角氏房心于東南

十日 〈十六年一月〉 堀田婆来 買左徠價二円三十錢

十一日 〈旧十二月三日〉 龜谷氏来 朝起至本伝寺今年始掃墓

夜半觀老人星 曉起軫角氏房心

〔日々春光、日々晴出、門好是逐、人行無場、想着靜中、趣欲經函、窓春雨

聞〕



十二日 至大学 帰路購名賢言行略六冊〔六十錢〕

既上臥床後法人某氏来余不見

贈書簡并金二円于浅田宗伯求帰脾湯

十三日 読易詩 尹致昊始携朴命和来 買三礼図〔五十五錢〕

十四日 〔日曜〕読易 揮毫爲倉吉 余欲誦易象象經文

〔入浴〕

十五日 読易、略読上下経 朴命和朝仙人入塾、尹致昊返十円金

得根本正書又得一吉書、此其初次也 今川覚神来〔謝卒業之事〕

十六日 朝少曇 然東方色明

至大学過高橋氏書舖 中嶋蒿来 大橋倉吉辞余家往横浜

黄村和 元日晴達人日□閑人□日不閑行昨從梅稚維墳前過聽得黄鳥第一声

十七日 〔十六年一月〕至保晃会 赴大倉喜八郎招宴以白檀火桶被贈、渠云

致今日之盛者由于読余著書故聊以表報恩之意云々 新居日薩来

〔浅倉九経解ノ中儀礼札記等ヲ得ル〕

十八日 中嶋逐波偕其妻大池松江来

十九日 至大学、読田子方篇 帰後読詩経匏有苦葉篇

二十日 大槻東易来

史記氷解題詞*〔14〕

少嗜史公書、甘之如珍羞、中年迷渺茫、旧学不可収、及將還初略、白髮已

滿頭、嘉君守素業、鉛槧不暫休、今又著此書、疑義力講求、使我距躍百、

龍門者再、世俗速成、治々逐末流、願言溯本、不辭炳燭幽

龍門者再、世俗速成、治々逐末流、願言溯本、不辭炳燭幽

少嗜史公書、甘之如珍羞、中年迷渺茫、旧学不可収、及將還初略、白髮已滿
嘉君守素業、鉛槧不暫休、今又著此書、疑義力講求、使我距躍百、龍門者再

搜、

世俗希速成、滔々逐末流、願言溯本源、不辭炳燭幽

品行論三部、敬字文二部贈於大倉喜八郎報十七日之招宴会与贈物也

二十一日 〔十六年一月〕日曜日 房

題中島逐波詩稿*〔15〕

学書池水黒、退筆似山堆、豈有自然妙、不從勤苦来、忽化龍蛇去、

何嫌絹素堆、猶留余興在、咳唾作珠来

〔憂〕絹素堆、猶留余興在、咳唾作珠来

学書池水黒、退筆似山堆、豈有自然妙、不從勤苦来、忽化龍蛇去、

何嫌絹素堆、猶留余興在、咳唾作珠来

余嗜朱竹垞文故又買曝書高集一部価七円也

〔是日贈書於九鬼隆一、曰欲施訓点于經史□□題抄、文部肯刻之否〕

二十二日 月曜日 読曝書高墓誌銘。正愛好之。是日感外氣謝客不見。使价

東華館於岡本氏

二十三日 火曜日 不到大学、以感外氣。当保養也

文学雜誌八十八号百余部送于諸国。使虎吉配布于諸府内神田辺

是夜芳川頭正招筵夜会、余辞不赴以病也

得吉池寛書云与八百吉晤云々、余即時作答書 第八十八号雜誌を年玉に遠

国に送る

二十四日 得一吉書「自金十郎而通送来」云毎月得三十五円於会社云々

二十五日

二十六日 至大学

二十七日 平生孝養如今日、我所自忘為老教

寿岡田大孺人八十八齡*〔16〕

〔能得寿〕由能飾躬、俟勤八十八年中、顛毛似雲未曾病、音吐如鏡何厭聾、環

能得寿

座芝蘭香氣馥、満堂賓客醉顔紅、期頤誰謂難攀躋、百福駢臻、天保

知是非難致

九如事々同、退齡識多、百福偕來存

もゝとせも千とせもつきぬ齡なり またも重ねん今日の祝ハ

ともく長保らけき春の日に季保かれと祝ひ喜ふ

米年の終を保つ君なれや 米の御倉に住つにき

期将天保九如祝

期頤何是為君祝

応將与幡桃王母同

能得寿由能飾躬、儉勤八十八年中、顛毛似雲未曾病、音吐如鏡寧厭聾、環座

芝蘭香氣馥、満堂賓客醉顔紅、期頤誰謂難攀躋、百福駢臻百禄得、期将天保

九如

祝、応与幡桃王母同

大久保一翁

魚允中

鄭秉夏

姜飢

趣町区第一街十七番邸山田方留海雄

欧羅巴

許眉叟退潮碑

夏

是応

豈敢

注 (1) 「題髪繡浄土画」『同人社文学雑誌』八三号(明治15年9月20日)、「髪繡浄

土九品相図」『敬字詩集』下巻載録)か。

(2) 「河合氏算術書題詞」『敬字詩集』中巻載録。

(3) 「題詩經評釋」(長允文『詩書評釋』明治16年2月出版)。

(4) 「送榎本公使赴北京」『敬字詩集』下巻載録。

(5) 「說耐軒詩草」『敬字詩集』中巻載録。これは曾我景章『耐軒詩草』(明治15年8月刻成)を指している。

(6) 「題古山淡香山林画卷」『敬字詩集』中巻載録。

(7) 「田島君墓銘」『同人社文学雑誌』第九〇号(明治16年2月20日)、のち『敬字文集』卷十一載録)か。

(8) 「諸葛君碑」『古今詩文詳解』第七五号(明治15年12月25日)、『同人社文学雑誌』八九号(明治16年2月10日)、のち『敬字文集』卷十載録)か。

(9) 「送竹添井々赴朝鮮」『敬字詩集』下巻載録。

(10) 「木城母飯田孺人墓銘」『敬字文集』卷之一〇載録)であらう。「木城母」とは木城花野のこと。

(11) 奥野昌綱訳『基督実録 全 Life of Christ』(英国韋廉臣撰、明治15年12月11日出版)のことであらう。敬字は「題言」を記した。

(12) 「香雲閣詩鈔序」『敬字文集』卷八載録)か。

(13) 「次韻黄村君」『敬字詩集』中巻載録)か。

(14) 「史記氷解題詞」『敬字詩集』中巻載録)。

(15) 「題中島逐波詩稿二首」『敬字詩集』中巻載録。

(16) 「賀岡田太孺人八十八寿」『敬字詩集』下巻載録。

明治十七年日乗

〔聖書之友会員証第七三八号 一千八百八十四年一月十八日〕

〔The Asiatic Society of Japan 領収書、一八八二—一八三年分〕

明治十七年

一月

一日 晴色可喜、但寒氣殊甚 是日賀箋八十二出ス

二日 賀箋 信夫 福地 目賀田 宮川保全 宮路 葵川 安生順四郎 新居日薩

藤野友徳 フルベッキ 沢田安親 寺田弘 神田乃武 外山 菊地 南摩 三島

内村 川田 藤しま 本宿松村 堤正勝 高橋精一 伊豆多田源藏 深沢 佃 立

花正五郎 中村能書 □□、名越、長松 □□三十、井上哲次郎

是日拜年二往ク所〔徳川様、勝、山岡、相馬、福岡、井上、大木、杉宮内

大輔、大久保一翁、長岡、大築〕 二日高橋氏午後来、余不在家

〔往高橋珊瑚閣得珍術万宝全書六本、唐鑑五本〕

三日 快晴 作〔洗冤史論序〕⁽¹⁾

石神貞齋、須田周鼎宛ニテ寿藏歌ヲ評シテ投函ス 近所江名刺ヲ投ズ

ふるくなり親しみまさる心地せり さらにふる名の慕はしきかな

返 高松のふる名を君に呼び出して常磐の色をせにや見すらん

四日 賀箋答者 答〔福沢英之助〕〔横浜太田不動下大田村乙千七百五十八番

地〕 三浦議官答〔木挽丁九丁目二十五番地〕 溝口梅答〔麻布仲ノ町十

七番地〕 股野琢答〔赤坂中ノ町五番地〕 宮島誠一郎答〔平河町五丁目

十七番地〕 竹村良貞答〔越後高田四辻町〕 志賀雷山答〔静岡県掛川中

学校〕 池田君一答〔遠州掛川宿集芳亭〕

遠州浜松柳町八番地

上の姓多くハ返書ヲヤル

杉浦為次郎方寓

伊沢謹吾なるべし

木下左兵衛

三宅雄二郎答〔神奈川県久良敷郡金沢野島浦〕 喰代豹藏答 是夜大雨

五日 青山忠惇答〔青山北町一丁目七番地〕 浅田澱橋答〔東多摩郡中野村

四千八百八十九番地〕 田島弥平答〔上州島村〕 川路寛堂答〔蠣殻町二丁

目二十四番地〕 大久保忠恕答〔栃木県日光町〕 岩瀬寛答〔水戸上市備

前町三十三番地〕 及川静答〔南紺屋町十五番地〕 秋山恆太郎答〔宮城

中学校〕 浦田長民答〔伊勢宇治〕 佐久間利三郎答〔伊豆加茂郡伊東和

田村〕 関桂林答〔芝新梅田町十九番地〕 アルフレットトムプソン答

〔芝高輪クラマ町〕 雨竭午後日出

昨日為伊東本文揮毫 塩津貢一郎

高谷龍洲 クラ、馬場吉人来時余浴、不相見

六日 艸高野松千代墓表⁽²⁾ 棚橋絢来

賀箋ヲヤル 三浦有恒答〔飯田町六丁目六番地〕 相磯格堂答〔駿州沼津

八幡町〕 岩田味三郎答〔美濃笠松駅元陣屋〕 喰代豹藏〔群馬ケン前橋

曲□丁二号〕

土屋勝秤〔駿河国駿東郡二子村〕 ヨリ書ヲタノミ来ル

七日 朴命和之父渾禹帰国ニ付築地小田原町⁽³⁾ 二往キ面会シ送行ス

印刷局ニ至リ写真ヲトル 高津、新納二氏并課長サヘグサ氏ニ逢フ 渡部

八郎〔中頸城郡渋柿浜村〕 小杉恒太郎〔千葉県千葉町〕 野口英夫〔山

梨県甲府〕 鈴木冬吉〔上総国下郡村鈴木冬吉〕 小林伴七〔越後新潟県

別小林吉太郎方〕 笠原恵〔横浜本町二丁目〕 保坂祐吉〔中頸城郡戸

野目村〕

八日 始至大学「棚橋不出休課」

九日 大学、易家人、論語 草間時福「大坂乙橋二丁目廿八」 小林日晷

「新潟西堀通七番町八番地本覺寺」 多賀繁吉「西蒲原郡曾根村」 森川

重正「ミノ厚見郡今原村」 朝夷亦郎「鳥取本町一丁目安城方」 芳賀宇

之吉「岩代国信夫郡応坂村」 児嶋法善「駒込西片町十番地安原金〇方」

阿波加脩造「越中魚津大町四十五番地」 西信敬「甲府魚町五丁目佐々

木屋ヨリ」 市島謙吉「越後高田新聞社」 平岡晴次「東海道蒲原宿」

皆川晏「越後国南蒲原郡三条四ヶ町村土木局出張所」

十三日 尾崎賀六「駿河国駿東郡小山村」 佐藤茂一「泉州堺寺地町西式丁

目」 小林正気「福島裁判所」 浜岡義道「富山県租税課」 大蔵将英

「熊本初審裁判所」 蔵直「千葉県印旛郡先崎村」 楨川源蔵「山形県南

村山郡山形旅籠町番外三十九番地」 村松賢一「愛媛県伊予温泉郡新居町

七番地」 鷺津精一郎「岩手県盛岡馬場小路」 清水弥八「日向宮崎上別

府村」 津守国敏「大坂住吉郡住吉」 乙黒直方「山梨県東八代郡相興

村」 山川省「鹿児島しま〇通金生町」 尾嶋丑吉「福島岩代国安達郡下川

崎小学校」 鈴木巖「盛岡大沢川原」 別府源一郎「大隅〇国始即郡重富

平松村」 古関安太郎「在大分」 渡辺村男「福岡県筑后国柳川袋町」 杉

田探源「但馬国神淵寺住職」 小沼宗吉「岩代国安達本宮南日輪寺〇〇」

川本正臣「群馬吾妻郡中之条町柳屋勘造」 岸鼎「備中窪屋町羽嶋村」

小山謙吾「長野小諸町」 大沢銓吉「大坂北区堂島北町二十八番地佐野方」

馬場策馬「福しま県磐城国平町五丁目」 宇都宮平一「埼玉ケン賀美郡

藤木戸村本蔵八」 長田銑太郎「下二番町二十三番地」 小松彰「西ヶ原

村十二番地」 高谷龍洲「愛宕町三丁目二番地済美鬘」 川路寛堂「蠣殻

町二丁目二十四番地」 佐久間利三郎「加茂郷伊東和田村」 浅田源橋

「東多摩郡中野村四百八十九番地」 石合又一「信濃国長久保郵便局〇〇」

森重遠「小日向表町三丁目二十番地」 秋山敏樹「牛込西五軒町四十七

番地」 甫喜山茂樹「西紺屋町九番地」 李樹廷「京バシ元数寄屋町二丁

目九番地对〇館」 佐久間多介「京バシ元西紺屋町二十六番地」 張滋昉

「麹町五番町十八番地」 森山寿雍「下式番町四十一番地」 松平頼徳

川口嘉「本郷西須賀町十番」 小林義則「文学社長、東京本町四丁目十六

パン」 竹村謹吾「麹町元〇町二丁目十六番地」 今川寛神「今川小路一

丁目四番地竹内ハの方」 松平太郎 竹内明太郎 本田幸之助「秀実〇種

所、富士見町五丁目十六番地」 茂木重次郎 岡沢徹「西小川町

五番地」 辻 棗 從五位松平武昭 中村能畫 三番町七十一番」 石村貞一

湯目補隆 「下谷区上野西黒門町四パンチ」 馬場吉人「霊岸嶋銀町二

丁目三はんち」 浅田宗伯 岡本監輔 増田多郎「神田〇所町九番地」

内村友〇「出雲国松江西茶町」 山内光寛「伊予国宇和島富原町十七番

地」 陸奥宗光「下谷金杉村五十番地」 黒川莊三「つる見千四百五十八

番地」 植松敬次「下総国海上郡芦崎村九十六番地」 佐久間貞一 沢田

善次郎「尾張町新地七番地増井寛〇〇〇」 賀箋 一日 八十二軒江出ス

十日 木曜日 二日ヨリ 百二十二軒 出ス

十一日 大学、論語

十二日 大学、易睽 明道会、麟祥院ニ至ル、発会 十河定保来ル

十三日 日曜 賀箋ヲ多ク発ス、コノ上ニ名氏ヲシルス

是日謹筮余今年之事、〇得中孚九二、日鶴在陰其子和之我有好爵吾与爾靡

之

十四日 月 大学 桃林寺仁藤鉅寛ノ頼ミノ詩ヲ作ル

十五日 火 大学 学士会院 鶴岡氏来ル、氏ノ為ニ三書ヲ作ル、一ハ高橋、

一ハ厲金、一ハ瑞穂^ハ屋

十六日 大学 陸奥氏へ往クベキ処断リ来ル

十七日 大学、易解卦、論休ミタキ由申出ル 陸奥宗光氏ヲ訪フ、会其不在、

品行論一部ヲ贈ル 保晃会ニ立チ寄ル

十八日 雪晴 大学ニ至リ生徒ノ文ヲ改ムル

十九日 〈土曜〉 大学、老子 陸奥宗光殿、渋谷隆藏来ル、奉納文抄を返す

中島雄氏墨堤江 旧友会ニ出会ス

二十日 日曜 前島君江参ル 吉田橋翁 中村氏、北沢氏来ル 広群鶴来る

柴田氏江届物菓子ヲ出ス 浅田宗伯届江二円為持遣る

「肅啓

本会編輯委員改正後、本年三月ハ閣下ト伊地知貞馨君トノ御両名ニテ御当

番ノ処、一日ヨリ十五日迄ノ分ハ伊地知君ニ依頼仕置候ニ付、十六日ヨリ

三十一日迄ノ分閣下ニ於テ御担当被下度候、依テ后半月間ニ会員ヨリ到来

セシ詩文稿ヲ取纏候処、別紙ノ通十三人分有之候間御廻申上候、何卒御閑

暇ノ節ニ御添削相成度奉願候、尤御丁寧ニ御批評ニハ不及ザツトニテ宜敷

御座候間、御添削済ノ上ハ端書テ一寸御報知被下候ハ、何時ニテ請取人差

出可申上候也 草々頓首

十六年四月四日

中村先生

侍史

文 福井繁太郎 平尾亨「巴静文」 神山隈 斎藤木一冊

質問 小野修三「五礼」 青木文「六芸」 友松藤井乾「ツガン沖家」

松平康国「懲姜」

詩 平松理英「字清石 号遊堂」 吉田久胤「硯山」 佐藤精明 今村芳

之助「字子郁 号文哉」

廿一日 改斯文学会詩文其人名如所糊紙 購文獻徵存録

是日斯文会、余不赴使价持会費五十銭往

廿二日〈火〉 大学、詩老子 図書館ニ参リ詩経弁償ノコトヲ言ヒ置ク 是

夜歌牌諸人集会ス、堀田氏ノ未亡人モ来ル 艸在邇録序(3)

廿三日〈水〉 木村芥舟贈黄梁一夢

廿四日 小沼亀次郎「常陸国鹿島郡宮中村」江一封出ス 夢ノコトヲイヒ来

ルモノニ答フ

二十五日 生徒ノ文ヲ改ム 小野梓 高橋泥舟 岩田味三郎被参

二十六日 周易□題略三本の

李忠定公奏議^三七本

亀谷氏江参ル橋窓茶話三冊ヲ返す 島田氏の宅江寄る

岩田氏江電信来ル、彼寓江届ケル

二十七日 日曜 朝木平、柳沢、木村、東条と議シ同人社之義ニ付申上ヲ清

書調印ス

午後井上哲、岡本監輔、大野氏、中嶋氏会ス、井上送別宴ノ積リナリ

二十八日 大学、易試験 同人卦 是日為中村能書序其所著

二十九日 大学、詩講老子

三十日 高津柏樹偕其子環与来 贈書於清水公子、言八家帖之事

三十一日 岡田正之ヨリ王羲之真筆写真ヲ借ル 中島氏、黄村翁ヲ訪フ

二月一日

「二月一日付「金子入書狀請取証合符」

二月二日

二月三日 大学、老子スム

来ル五日募集漢籍課生徒試験ニ付書経左伝史記等

禹曰都帝慎乃在位、帝曰兪、禹曰安汝止惟幾惟康其弼直惟動不応侯志以昭受上帝天其申命用休

太甲上

伊尹言曰、先王味爽不顯坐以待旦旁求俊彦啓迪後人、無越厥命以自覆慎乃儉德惟懷永図

左伝 僖公十五年晋侯謂慶鄭曰寇深矣、若之何、対曰君実深之可若何、公曰不孫卜右慶鄭吉弗使

僖公二十二年

公曰君子不重傷不禽二毛古之為軍也、不以阻隘也、寡人雖亡国之除不鼓不

成列

聞目

管仲子産ノ優劣如何

又 □礼ノ国ヲ讓リシハ後人□テ乱ヲ釀スヲ以テ之ヲ 議スルモノアリ、

是非得失果シテ如何

是レ然リヤ否ヤ

是ナリヤ

是レ然リヤ否ヤ

史記 李將軍列伝
胡騎得広、広時傷病、置広両馬間終而盛臥、広行十余里、広佯死睨其傍有

一胡騎善馬、広暫騰而上、胡兒馬因推墮、兒取其馬

魏其武安列伝
臨汝侯方与程不識耳語又右避席、夫無所発怒乃罵、臨汝侯曰、生平毀程不

識不直一錢、今日長者為寿乃效女兒咄囁耳語

燕太子丹、荊軻ヲシテ秦王ヲ刺サシメテ中ラズ、国遂ニ滅セリ、モシソ
レヲシテ中ラシメバ果シテ如何秦滅ブベキヤ如何

*項羽烏江ヲ渡ラズシテ 自刎シテ 死セリ、若シ羞氏ヲ忍ヒ再挙ヲ謀ラシ

メバ 成敗果シテ如何ナラン

漢天下ヲ取ラサルモ漢高ヲ悩マスニ足リテカアル

果シテソノ結果如何 成敗果シテ如何
項羽烏江ヲ渡ラズシテ自刎シテ死セリ、若シ羞氏ヲ忍ヒ再挙ヲ謀ラシメバ
成敗果シテ如何ナラン

四書説約 十本 2,00 釈迦譜 十本 2,00

名物六帖 三十本 3,50 淳化帖考正 四本 1,00

徐氏筆精 十本 1,50 杜詩注釈 2,50

返ス

四日

五日 大雪 大学、詩講碩人郎 大学新募生徒試験二十二人

祈大黒天文言「昔物先考所授、余之呪言、今説法華経得其文字 信解品」

《譬喻品》

十宝大車其数無量深 自慶幸獲大善利無量珍宝不求自得慈眼視衆生福□海無

量諸餘怨皆悉摧滅

六日

七日

八日 大学 新募生徒 品評ヲ定メ「総理ニ出ス」是日印ヲ持参、稟請書ニ連印

ス

九日 本日所勞不参届ヲ出ス

十日

十一日

二月十八日 所勞二付今明兩日之間不参届ヲ出ス 惣理ヨリ明日十時ニ出頭出来候ハ、可致相談事有之候段申来る

〔破損〕ヲ筮ス

ニニ小畜ノ四爻變ヲ得タリ

六四有孚血去惕出无咎 象曰上合志也 断曰無妨只須吾務有孚則吉

□期望スル所ノ事 □ヲ筮ス

ニニ履ノ五爻變ヲ得タリ

九五夫履貞厲位正当也

断曰夫履ハ定メテソノ地位ヲ履ムコトナレバ期望スル所ノ事 □必ズ得ラル

ベシ、但シ九五ハ衆望ヲ負フガ故ニ貞ヲ守リ憂ヘ危ブム、虎尾ヲ履ガ如クナレバ過拳ナカルベシ、所謂剛中正履帝位而不疚光明也、無上ノ吉占ト為

シ自ラ慶幸スベシ、上九又曰視履考

祥其旋元吉トアリ、行ク先キニ至ラバ益、福祥アルベシ

十九日 多田源藏偕其妻女來訪 昨日関口惣重郎來

二十日

二十一日 大学ニ至リ湯治願ノ下書ヲ取り浅田氏ニ廻リ診断書ヲ取りニ行ク

信夫恕軒來談同行之事

二十二日 浅田氏百日紅園記文ヲ評ス

余所臨讀此文不能無今昔之感
余陪□教□諸老文酒之筵

曩時

精神氣魄万不可及感服
一片真氣流露於筆墨之間
此乃文之
此乃医之

園井之桂再芽而開花

既立於其大者

二十三日 多田源藏帰于豆州

二十四日 絶句三首*(5)

秋風破屋下、杜陵志何大、広厦千万間、欲庇天下士、眼界放得大、

心地開得豁、如是而已矣、聖賢仏菩薩、行其所無事、治水別無術、

胸襟拓得闊、此真不皆然、絶妙文在茲、行水於無事、禹豈有謬所

運筆於自然、義之無別法、聖是法、逸少□詭道

秋風破屋下、杜陵志何大、広厦千万間、欲庇天下士、眼界放得大、

心地開得豁、如是而已矣、聖賢仏菩薩、行其所無事、治水別無術、

運筆於自然、義之無別法

有感(6)

折我園中花、挿我座中瓶、損花縮其寿、何莫不知重輕、補我園中虫、

聽我籠中鈴、使渠喫囚苦、何忍喜其鳴、吾因喻童子、家若連棟甍、

風塵混市井、寸土無園庭、乃買花一朵、挿瓶也有情、乃買虫一籠、

懸簷也可聽、今我園林広、花木交輝榮、春色無缺乏、秋声有餘贏、

有園為無園、何用損物形、樂鳴為苦鳴、何用害天成、万象皆園中我

動植皆吾氓、欣々物皆私、擾々皆有宮、無害彼自然、可娛我視聽、

無損彼形体、可怡我性靈、童子若有悟、魚兒在小☆、持出池水上、

我信自然、以斂其征、快然為一傾

二十五日 湯治願之通り開届旨大学ヨリ使來ル

おてつ、信夫氏ニ參ル 十五円預ケル

○禹稷持濁世、巢許鼓清風、譬如晴与雨、均皆成農功、妙在相濟処、

任人論異同(7)

不容

○喜看山戲含笑、愁見花灑淚、情境不在外、造命之只在己

○百卉花非不好、誰能耐三冬、青々不改色、我受一庭松

*○讀書何所樂、在怡心日如、入宝山中、弥佐路所獲

讀書何所樂、在怡心日如、入宝山中、弥佐路所獲

二十六日 將赴熱海泊于小田原

金一円 汽車二人代

金 藤沢昼飯代

金二円 人力小田原ヨリ熱海迄

金三円 「老人ニ付一円五十錢」 神奈川ヨリ小田原迄別

仕立馬車代

金 真誠社諸入用代

二十七日 着于熱海

二十八日 步至温泉寺

「頃日中村敬宇先生忍恕軒君ト同ク熱海ニ遊ブ先生左ノ長篇アリ……」切拔

二十九日 曉八時発熱海晚十時帰宅

三月一日 「庚戌」

三月二日 「日」 「辛亥」 斎藤為其考法事十七回忌以茶飯酒肴見贈 中島氏

往清水篤守君邸、八家帖与通鑑交易之事成矣

三月三日 「月」 「壬午」 雨 与中島氏談

三月四日 「火」 「癸丑」 風 読外史

三月五日 午後風息

三月六日 遊杉田邸 十一時出宅午飯 鐵道亭 西洋料理六十錢ヅ、二円十

錢杉田村迄往返老檢七十錢ヅ、

三月七日 專称寺へ墓を探しニ参る 伊豆杉田村迄往返老屋清兵衛夫婦の墓

を見出す、午後帰宅後專称寺西念上人江五十セシ、婆に二十セシ、花代

二セシ、平藏（人力）ニこのことつかハス

三月八日 西の海へさらひさらひて

西の海へさらひさらひて杉田村迄往返老何もなし、たゞ同心の臭のミ残れ

る

三月九日 日曜日 某貴顕所聴之事甘心行謀之乎、將出於不得已頗有所困乎

否、謹筮之

ニ地風升 之地天忝

初六允升大吉

忘るなよなよといひしハ呉竹のふしをへたつる□にそ有ける 清少納言

十二日 （二月十五日） 終日風雨

十三日 晴

寄中島氏*

吾兄數年前訳青隊勲功記、成可知修英學其所至造詣皆于中、雖不深而其於

解文理也為有餘矣、其由字書而獨力誦致功從事 每日得半頁一枚或一頁也、為有餘

矣、吾兄年尚壯前程而時不可失矣、請自今而欲為他日有用之人□□刻披英書

兩引字書以此為課、他日載錄之功可勝言哉、人材可得而得也、至于寬立課

程發用工夫及其妙進學而法則吾兄自知矣、奚飯余言何時

* 吾兄數年前訳青隊勲功記、可知修英學其造詣雖不深而其於解文理也為有餘矣、其

頼字書而從事每日得半頁枚或一頁也、為有餘矣、吾兄年尚壯而時不可失矣、請自

今□□刻披英書兩引字書以此為課、他日載錄之功可勝言哉、至于寬立課

程發用工夫及其妙法則吾豈自知矣、奚飯余言

得画禪室隨筆二本、四十錢 東坡詩陶詩二本 「二円半」

十四日 五時見房心在南方 地少震 月色明而星無光 ○自十二日以来読ホ
―セツト氏經濟書

信夫氏以十五円見還、余対之曰、行将算還所費

あたミとて^{〔四〕}あたにハミまし我父の 生れしさとに近しと思へバ

十五日 感冒ノ氣味ニテ終日不執□

十六日 同上

十七日 永井重仁ノ子来リソノ父墓碑文ノ札トシテ予メ金五十円被贈、受取
置

*一書拝呈仕候、益、御起居清祥奉扑賀候、過日者徴兵令之義ニ付何分か

私学生徒迄ニ保護恩典^{〔一〕}を蒙り度願意紙面ヲ以テ^{〔二〕}願言上仕候、其後御玄關迄

罷出候事有之、折節御病氣ニ被為在拝顔も不仕、其後小生持病之下血ニテ

医者之言に従ひ^{〔三〕}御座候^{〔四〕}熱海江入浴致候^{〔五〕}、其後風邪

にて^{〔六〕}只今も褥上に臥り居候次第第二御座候、何レ快氣次第参堂^{〔七〕}仕り^{〔八〕}可奉得

御意^{〔九〕}候得共、先者前文之事情^{〔一〇〕}申上度如斯御座候也 早々頓首

三月十八日 中村正直

大木文部卿殿

三月十八日

大木文部卿殿

*一書拝呈仕候、益、御起居清祥奉扑賀候、過日者徴兵令之義ニ付何分か私学迄

ニ保護恩典を蒙り度願意紙面ヲ以テ言上仕候、其後御玄關迄罷出候事有之、

折節御病氣ニ被為在拝顔も不仕、其後小生持病之下血ニテ医者之言に従ひ熱

海江入浴致候、其後風邪にて只今も褥上に臥り居候次第第二御座候、何レ快氣

次第参堂仕り可奉得御意候得共、先者前文之事情申上度如斯御座候也 早々

十八日

十九日 水 感冒未痊に付廿二日迄不参届ヲ出ス

二十日 鴈仙送百川学海来 正 百六種 2

続 百六種 3

廣 百二十種 3

二十一日

二十二日 土 伊三郎成田ヨリ帰リ来リ質入田地受戻し度ニ付二百円^{〔一〕}買入^{〔二〕}

用之由被申出右ニ付金子入用義有之

十七史弘□録五箱汲古□□、六十五円 三〇集、十五円 南北史、七

円 十三經注疏汲古、十六円 右四種代金百〇三円二売ル

書物をば売代なして質入レの田地受ケ出す事ぞ抄らし

二十四日 月 今朝ヨリ不参届ヲ大学江出ス

二十五日 鳥尾得菴見訪、西京江被参五月にハ帰ル云々

貴□□拝誦仕候、如愈余寒忌兼候処益、御多□被成御起居奉賀候、今般伊

三郎被参地所取戻度旨御添翰之通り云々と申聞候、私方にて差当り余裕も

無之候得共漸ク都合致シ金百七十八兩伊三郎へ貸し渡申候、先般二十二兩

差出置候を合せ二百円乃高に相成申候、就而者被仰越候通り証書

等之儀□□向ニ規則丈ハ為取行被下度は又差入并証人等之義ハ差入レ日限御取引

可被下候、先者右申上度如斯御座候也 三月二十五日 中村正直

深沢録郎様

三月二十六日 《明治十七年》快晴 今日大学ニ出勤ス、妬之卦 回顧すれ

バ先月二十六日熱海江出立せり、□□今に至り凡そ一ヶ月也

二十七日

二十八日 至大学、論語

二十九日 土 大学、易萃 木平氏来請余明細短冊

三十日 日 有賀說三郎今朝二時歿 揮毫 天野勲彦來

三十一日 大学、升、論語子張問善人之道 退書書屏風成工人持來

四月一日 火曜 試驗後休 雨

二日 晴 大学、困卦

三日 神武天皇祭 成瀬温來談書法

四日 大学、論語 揮毫

從五位戸田忠義來請其先人墓名 牛込横寺町二拾九番地

五日 病不至大学 十河氏來 成瀬來

六日 於鐵至信夫祭返金十円

七日 大学、井卦 論語点尔何如 至浅倉屋獲星鳳樓帖、価四十九円

*姚志梁先生

久不奉震良者久矣深為抱歉今朝三寫穀付以新刻二冊自

閣下軼致者披之則九日詩集也受載黎公之文具述當日情事宛然在目謂与可

序嬌美 千秋可也、而中東 人士諸什之中鄙作亦何榮如之且媿且喜

抑黎公曩賜無 謝不堪感謝之至、以古佚叢書見贈今又自 閣下又有此貽以是書洵

無堪感謝之至、但念 敝邦 偏小 未有物以之 奈之何哉、行応詣 貴府

僕亦行応幽然谷而上 高堂 奉 誨、今聊片言鳴謝今如此并候台 安

姚志梁先生

*久不奉震良深為抱歉、今朝三寫穀价付以新刻二本日、自

閣下軼致、披之則九日詩集也、黎公之文當日情事宛然在目、謂与可序嬌美千秋可也、而中東人士諸什之中鄙作亦廁焉、何榮如之且媿且喜、抑黎公曩賜無以古佚叢書見贈、閣下又有此貽、無堪感謝之至、但念敝邦偏小未有物以之奈之何哉、行応詣 貴府奉 誨、今聊片言鳴謝如此并候 台安

八日 火 往大学、棚橋不出教場無課業 読易

九日 水 癸丑 革 大学 高島氏來話漸卦之事

十日

十一日 是夜月蝕

十二日 大学、鼎卦彖辭及初爻 晚赴岡氏「千仞」送別宴 松村操没〔四月

六日〕、香料壺円五十錢ヲ贈ル

十三日 日 内子及娘始往成瀬温家、娘執貨字書

三得謙卦余深自恐懼、亦因以自慰。自今當務毅然豪然出于稠人広衆之中不
當愧作閉藏也

朝訪向山黄村及大木文部卿 大木病不見 中井敬所新家孝正來

十四日〔甲午〕 病不往大学 鱗角來 宇都宮平一來托平田宗之碑文 晚吉

田新來、病不見

十五日 〔四月十五日〕 不至学士会院〔有病知不快故也〕 明日早朝直吉上

総国故郷江帰省ス 宮本君招 得易鼎上九

○漢学德国学比較〔報知新聞〕 愧且憤焉、筮得乾初九、有望の後來 余願
質於後日也

自去年至今日講易凡一年、蓋去年四月十六日始講易乾卦也

十六日 鼎九二至上九 大学 渥美之招キニテ墨堤桜餅ニ参ル 履園叢話

〔三円二而〕得ル

十七日 木 明治字典之事ニ付 来ル 午後訓盲院ニ至ル

墨堤看桜ノ盛ナル一証〔十五日ノ事〕

今戸ヨリタケヤノ渡し舟賃一人二付四リンヅ、乗客六千五百人 アガリ

高金二十六円

十八日 大学、仲尼問仁章 送岡鹿門遊清国序 浅田ノ文ヲ評ス 赴宮本氏

招

十九日 大学ニ至ル、気分不宜ニ付休 艸股野⁽³⁴⁾ 詠史詩抄序

dream promisable 河田、神田、吉田

二十日 日 野村素助宅ニ参リ星鳳梅帖ヲ比較ス 信夫宅江参ル 小金井江参リ留守ナリ

二十一日 月 大学、震卦 午後岡田免毛ト浅艸ニ参ル 星鳳梅等代等払ふ
二十二日 雨 改生徒文

至六月余意憂愁可得解乎否謹筮、得大壮之第五爻変曰喪羊於易无咎 参諸高島易占而知為吉矣

奥野昌綱来為改其文 清水雪雄来

二十三日 四月 大学、論語 枕橋八百松ニテ大学親睦会ナレドモ雨天ニ付不赴

二十四日 快晴 恩田則正来 清水篤守君来

◎川村正平来 山川善太郎来 山田善太郎来 小林宮智来 清水重雄来
島郁太郎来

二十五日 大学、盍徹乎 金二円二十三日之親睦会費ヲ出ス 揮毫

昨日林擁書城ヨリ考槃余事「八十錢」を買フ 相馬氏女子ノ名ヲ御⁽³⁴⁾宜

二十六日 大学、漸ノ卦 神奈川県久良敷郡太田村千七百四十五番地⁽³⁴⁾ 氏人来ル

奥住猶文、宮城県平民

二十七日 教法事等ヲ買 奥住氏来 小林宮智来 再携麥

酒一箱⁽³⁴⁾ (桜田ビール) 来 余至珊瑚閣得立志編揮毫唐紙

三枚 使贈于小林宮智 神道惣平ニ五圓ヤル

二十八日 四月 大車以載 有攸无咎



拝啓仕候、過日参上〔貼紙により不明〕

〔貼紙〕「昨七月中静岡表芹沢氏より書面持参取出其度早速御目通り被下
□□様御目通り奉願度候也 本所緑町二丁目一番地藤田七藏」

病不至大学 今日斯⁽³⁴⁾文会開⁽³⁴⁾覺⁽³⁴⁾式 病不往、祝文⁽⁹⁾ヲヤル
相馬永胤得女子、今日七夜被召保養ガテラニ往

二十九日 擊劍教師之事ニ付相談

三十日 大学、帰妹 秋山陽一入門

五月一日 土屋勝稗来 読豊卦

二日 榎本公使来

三日 不往大学

四日 日曜 揮毫

《平田宗ノ碑文ノコト》

五日 月 大学、易試験 艸其背 高橋泥舟来

六日 火 亀井戸天神新宿藤花

七日 水 大学、論語試験 子曰回也其庶乎一章 伊東本支来 累卵図ノ七

古ヲ作ル 西坂成一来 新選百人一首の序を被頼 小柳氏来ル、曰ク明治

六年学僕に成ル云々

得行書類纂「十二本 一円六十錢」

高橋泥舟氏を訪ふ 千葉⁽³⁴⁾ 造氏累卵之詩を作り⁽¹⁰⁾

八日 五月 木 至浅艸得

楊名時久集 175 十二冊 釈迦譜 一円六十錢

焦□図集 155 十二冊 下本ニヤル

法相名目 40 五冊

法華経□□ 30

九日 高橋金十郎婚筵二会ス

十日 土 大学、豊卦 中村樓岡伝兵衛招二至ル

十一日 日

十二日 月 大学、旅卦

十三日

十四日 水 大学、巽卦

十五日 学士会院江断リヲ出ス

十六日 西坂来、十八日金幸堂ノコト

十七日 大学、兌卦 佐田白茅来、金二十円を借す 幕内^(マ) 来ル

十八日 〈五月〉龍泉寺村原氏別荘会「西坂氏誘、南摩氏来」

十九日 月 大学、渙卦 論語

二十日 火 成瀬大域来 午後佐藤槐来

二十一日 水 大学節卦 至偕楽園楊守敬祖席也、賈周易訂詁「十三円」

会者^(一)黎庶昌、^(二)楊守敬、^(三)姚志梁、^(四)巖谷、^(五)日下部、^(六)重野、^(七)小牧、^(八)川田、

^(九)宮嶋、^(一〇)龜谷、^(一一)三島、^(一二)向山、^(一三)蒲生、^(一四)森、^(一五)長松

二十二日

二十三日

二十四日 中孚卦

二十五日 日曜 成瀬氏□会、応信夫氏招看芍薬食洋饌

二十六日 大学、小過卦 論語「教□□」

田中□□君贈花团于荆妻

二十七日

二十八日 大学、既濟卦 得五經文□三冊

二十九日 夜半後吐酸敗液

三十日 是日 不喫朝飯 夜喫飯少許ヲ 是日劉会、謝不往
三十一日 病不至大学 艸羽峰五古五首和韵詩
六月一日

二日 大学、未濟

三日 大雹

四日 病不至大学

五日

六日 小石川菓園宴会

七日 大学、乾象象 訪伊藤圭介氏

八日 黎汝恒、陶大均及^(マ) 来

九日 大学二至ラズ、少痾二因ル

十日 大学二至ル、棚橋老子試験 小石川植物園二至ル、中寫氏ト共ニ行ク

朱熹謂晋宋間釈氏文字亦只以老莊之說鋪張、蘇軾謂仏經之訳必託于儒之能言者然後伝遠

〔圖、十五日記事の前〕



右重野氏ヨリ問ヒ二来ル

十一日

十二日 文部卿大木氏、森氏、大久保氏ヲ訪フ

〈是日婦人慈善会〉

十三日 榎本氏ヲ訪フ、内務省へ至リ田原氏

十四日 大学、文言乾卦終

〔記事「筆話（承前）切抜」十七年七月十七日

十五日 〈目〉学士会院ニ出ル

十六日

十七日 午後四時ヨリ秋山敏樹方江被招、日薩師被參

十八日 仙駄ヶ谷江参リ六十五円返納ス 岡田長保来ル

十九日

植物園

東京大学教授中村正直儀、植物研究之為メ其園栽培之艸木採析之儀願出聴

届候条此旨相達候事

明治十七年六月十七日

東京大学惣理 加藤弘之

潜研堂全集、吉川ヨリ一帙見本来ル、代二十五円

所持の詩文集ヲヤル何ホドノ価ニ引取ルヤ、ソレ次第にて定メル 瑞穂屋

卯三郎来ル

東京府士族

内務省地理局雇地誌課

田原秀毅

五拾七歳一ヶ月

神田区錦町一丁目四番地住宅

明治十三庚辰年十一月二十四日内務省地理局雇地誌課被仰付月給貳拾円被
下候

明治十七年六月

二十日 文部省ニ参リ西村氏ニ逢ヒ田原氏ノコトヲ托ス

二十一日 大学、論語試験、回也其庶乎章 守本文静来

二十二日 晷替

二十二日 日曜日

二十三日 大学、易試験「中孚九二爻」 竹添氏ヨリ樹庭文鈔、四書典故并

正ヲ買フ各一元五十銭

買潜研堂全集二十五円

下本 孝経衍義七円

潜研詩文十駕□ 四円五十銭

二十四日 読Bates インスチチュート レクチュールス

二十五日 大学へ使ヲ出ス「破損」 「トクコク」 德国

大槻文彦来ル、来ル二十九日不忍池ニテ磐溪先生の七回忌祭ヲ為スニ付被

招

〈Beiwort 形容字 geschlechts wort 冠詞

Binde wort 接尾語〉

二十六日 至日本橋買今世八大家文三本「三十セシ」 西域見聞録一本「二十

五セシ」

二十七日

二十八日 終日雨

二十九日 磐翁七回忌祭ヲ不忍池弁天祠ニ於て取行由ニテ大槻文彦ヨリ被招

参ル

〈是日大槻先生〉

三十日 大学ニ至ル、品評ヲ定め教務掛ニ差出し置

〈大学生徒品評ヲ定メル集会〉

〔倍因氏教育学〕 公告切抜

七月一日 明六社ニ至ル。〔津田真道、津田仙、西周、神田孝平、加藤弘之、箕作秋坪、同大麓、外山正一、清水卯三郎、中村正直、田中不二麿〕

送田中不二麿君赴伊国（一）

大秦 在漢史今伊国。王名記安端。世界之主母。富強曾固無倫。盛衰曷有常。

興廢倏忽遷。今尚為列邦。猶存自主權。聞道到處多古蹟。搜討發見新。

山水矧秀麗。逸興只遊觀。氣候得中和。婉淑出美人。毛髮黑可鑑。

眼目白黑分。又聞鄂英人。此來宿病痼疾。使節駐此者。如福地洞天。

君久掌教育。在官居要津。一朝膺寵命。知由慎与勤。臨別情益深。

宴席迭主賓。只待旋歸日。多聞所未聞。

同人社

老ケ年収入 老万五千五百九十四円

老ケ年支出 老万五千 九十二円

二日

三日

四日 金

五日 土

六日 日 明道協会ヨリ喜捨金の義申来リ候間左之通答ヲヤル 此日鳥尾得

庵君来

明治十七年七月ヨリ

明治二十年六月迄

今より向三ヶ年之間毎月六十銭宛ト相定メ喜捨金差出し可申候也

東京明道協会幹事殿

七日

八日

九日 八百古帰自巴理

十日 得星巖先生遺稿八冊 訓盲院試験ニ参ル

十一日

十二日 得星巖先生遺稿八冊

十三日 日曜 教育会ニ参ル 中村楼ニ至ル

〔猿楽町専修学校「卒業式」〔於中村楼〕記事〕

十四日

十五日

十六日 岡田氏大母葬式ニ参ル

十七日

十八日

十九日

二十日

二十一日

二十二日

二十三日

二十四日

二十五日 永井重仁墓銘（¹²）ヲ作ル

二十六日 早稲田専門学校卒業式ニ参ル
二十七日 重野氏、玉乃氏ニ参ル 寺田ニ晤ス
二十八日
二十九日 女子師範学校卒業式ニ出ル
三十日 中島氏出立ス
三十一日
八月
一日
二日
三日
四日
五日 何礼之来
六日 信夫来 鳥尾来
七日 買金魚
八日 ドイツ書廿四冊「外ニ弐冊」価金拾三円五拾銭「一ツ橋通香所屋源七
ニ而求之」
九日
十日 高橋□□来
十一日
十二日 万法精理 柳沢氏持参来ル
十三日
十四日
十五日
十六日

十七日 高橋のぶ姑来 三木屋来
十八日 為三木屋揮毫
十九日
二十日
二十一日
二十二日
二十三日
二十四日
二十五日 「数日前ヨリ」清仏戦争起ル
二十六日 昨夜ヨリ大風 風休天晴
二十七日
二十八日
二十九日
三十日
三十一日
九月一日
九月二日
九月三日 大学ニ出ル 漢学科ノコトニ付相談有之、僕者孟子毎週六時間フ
エル
明治十四年七月同人社卒業生 高木秀臣倅「高木甚平」〔名刺〕
九月四日
五日
六日 土曜日 文章試験 六時ニ上野精養軒ニ行ク
七日 日曜 秋月胤永氏江被招

八日 大木文部卿ノ宅江札ニ参ル「徂来政談、白川夜話二種ヲ得タリ」

〔田中九鬼紅葉館〕

九日 五時紅葉館ニ参ル、田中、九鬼両氏ノ招ナリ

是月

六日 朝十時御用召ニテ太政官ニ出頭候処、

勅任ニ被進自今年俸千八百円下賜候事

金井之恭氏大臣ノ渡スベキ訳ヲ申シテ右之御書付を被渡 昨夜来君王来守

宮辞残血歎至始識愁

玉階昞春月

十日 本郷大学ニ出ル、試験品等を定ム 三島、嶋田、秋月氏ト会ス

高野松千代君墓表〔別紙〕

是為松千代君之墓、君長崎裁判所佐賀支庁檢事從七位高野孟矩君之長女也、

君記其致死始末曰、^{〔松千代〕}生而健未嘗病、但頸有靜脈重腫及一〇〇父母抱

之往公立病院乞診、院長曰、治之甚難、^{〔以〕}行切斷、明治十六年二月二十三

夜、^{〔使〕}松千代^{〔兒〕}受治術、午後四時、余退庁^{〔往〕}病院^{〔正〕}時方^{〔施〕}術、父母在傍可三時

其間^{〔施〕}術善畢、^{〔移〕}松千代^{〔兒〕}於臥床^{〔患〕}者^{〔於〕}臥床^{〔母〕}始得見其狀態、^{〔松千代〕}熟視父母顔、微動手

足、是時院長醫師外國人等皆退出、既而院長来診^{〔患〕}者、又出迎外、曰人来

伸縮^{〔患〕}者手足、或強压胸腹部、或以指入口中使吐、或撮出舌、或以電器、

或助^{〔施〕}呼吸術、最後院長謂、余曰我初不意^{〔如此〕}之難^{〔平〕}、此也由于^{〔施〕}術費^{〔費〕}意外^{〔時〕}

投過量^{〔之〕}藥、而致死也、雖然此腫不及今切斷、則他日必為喪命之根、故施

術亦非得已也、余聞而付之^{〔於〕}無可奈何而已矣、君使其弟孟治来請余評其墓

仍系以詞^{〔二〕}曰

昨日膝下 笑容可掬 今日牀上 痛苦^{〔啼〕}哭

噫噓不幸 致此慘死 父母之哀 曷維其已

□婦るくなり□しにまさる心地せる

ハふるく□□

天□詩鈔叙〔別紙〕

元遺山曰指出退之山

石□始知渠是如

郎詩然如山石雄

洋变化因大觀

矣中晚清德纏

錦婉約所独不可重

乎詭斯編者心知

山石如郎益有其妙

不可執一而論也

十六年十二月二十日

敬宇正直

注

(1) 「洗冤史論」(山崎衡『洗冤史論』(明治18年5月出版) 收録、のち『敬宇文集』卷九所収) か。

(2) 「高野松千代君墓表」『敬宇文集』卷十六所収。

(3) 「在邇録序」(長九文『在邇録』明治17年2月出版收録、のち『敬宇文集』卷九所収) か。

(4) 「雪中作」『敬宇詩集』下卷所収。

(5) 「絶句三首」『敬宇詩集』下卷所収。

(6) 「有感」『敬宇詩集』下卷所収。

(7) 「讀史有感」『敬宇詩集』下卷所収。

- (8) 「詠古詩鈔序」(『敬字文集』卷九所収) か。
- (9) 「祝開覺文」(『敬字文集』卷一三所収)。
- (10) 「累卵帖」(『明教新誌』第二三四一号(明治21年3月18日) か。千葉立造の「累卵図」への題詩と思われる。『敬字文集』卷之一五に「書累卵圖後」がある。
- (11) 「送田中不二麿君赴伊国」(『敬字詩集』下卷所収)。
- (12) 「永井君墓銘」(『敬字文集』卷十一所収) か。

明治十七年九月六日ヨリ

其後〔破損〕申上候早出□□なるもの此節一層甚敷相成午前八時出頭午後五時又者六時に退省候時宜且日曜又者御祭日とても一切休安不仕夜々勤務に従事〔表紙貼紙〕

ポリチカルエコノミイ（ボウエン）著

1. 文明国ト野蛮国ノ差異ハ□□安樂ヲ享受スルノ具ニ

実足スルト缺乏
於テ具備
於テ無所不備

スルトニ在リ、所謂安樂ヲ享受スルノ具□□ハ、即チ衣食宮室舟楫金玉器具

文飾凡ソ五官ノ嗜好ニ適スル者有^形質ナル物皆是ナリ、雖然無^形質ナル五官ニ

シテ亦人ノ願欲ノ要須ト為ル物アリ、衣食ト同シク売買ノ価ヲ生ゼリ^{即チ}諸^至

〔二明〕狀師美声ナル歌伎^{芝居ノ役者及ヒ医}者ノ如キハ市ニ鬻ケル者ノ如^{及ヒ梨園ノ子弟及ヒ}

ク価ヲ生ズルナリ

凡ソ多少ノ勞苦ニ由テ生ゼル日^生資生ノ具、有質ト無質トヲ論ゼズ凡ソ安

樂便利ヲ享受スルノ用ヲ為シテ売買ノ価アルモノヲウエルス（財）トイフ、

コノ財ヲ多ク有スルヲ富トイフ、少ナキヲ貧トイフ

一番町四十三番地 三島毅

九月六日（明治十七年甲申） 天晴 今日午前十時礼服用着

太政官ニ出頭致候処

勅任ニ被進自今年俸千八百円下賜候旨拜命ス

九月七日 日曜 秋月胤永氏ニ被招 六時ニ高木義秀臣倅甚平独逸江留学ノ祝

として上野精養軒ニ被招

八日 大木文部卿ノ宅江礼ニ参ル、徂来政談、白窓閑話二種ヲ得タリ

九日 夕五時紅葉館ニ被招、田中、九鬼両公使ノ留別ノ振舞也

十日 大学ニ出頭ス、試験品等ヲ定む 三島、島田、秋月三氏ト会ス

十一日

十二日 相馬永胤宅ニ参ル「ソノ欧行スル故也」 川田甕江君来

十三日 朝、九鬼公使ノ宅ヲ訪ヒ告别ス

十四日 （日曜）高橋珊瑚閣ニ至ル、高嶋嘉右衛門氏被参由承ル 揮毫 帰途

ニ史評態耳集ヲ得タリ 岩村通俊被参 礫水翁墓銘を被托 横井忠直祝賀ニ被参

是日、九鬼公使、相馬永胤六時ニ新橋汽車ヲ発ス

明十五日ハ神田祭礼ナリトテ於鐵、於高神田江参ル

十五日 （月）大学ニ出勤ス 漢書課第六級生二十一名出席ス 下読等新帰ニ

テ未^ル為向多哉^キ二見受候ニ付休ム 是日風雨甚暴、倒樹木墻屏

十六日 （火）大学ニ出勤ス 井上円了ソノ親病アル由にて未ダ帰校セズ、

故ニ休ム

十七日 （水）大学ニ出勤ス、易坤ノ文言ス 論語ハ書物ヲ未^ニ受取モノア

ルニ由テ休ム 新選第一期孟子ハ来者僅八名ニ付キ休ム

今朝高橋門兵衛、伊東七兵衛参ル

宮本小一君被参祝ヲイヒ風暴ノ見舞 高嶋嘉右衛門江飛暴ノ見舞のハガキ

をつかハす

十八日 （木）大学ニ至ル、孟子論語「第一期生始マル」 今日風頗ル暴但シ

北風ナリ

十九日 （金）大学ニ至ル、論語、孟子輪読「第一期生今日ヨリ始マル」

珊瑚閣ニテ寺田望南ト晤ス、得絵図爾雅

二十日 〈土〉大学ニ至ル、易輪講 明日田中公使出立ニ付送詩ヲ扇面ニ書シ
為^セ持テ贈ル

夜夢 加藤栄助翁 歌を唱へて余に書せしむるに「ます」と呼び出せしに
「ま」としたためかけ、又真と改めしを翁、山の下に宗の字を書すべしと
いへり、崇^{マス}と書したれば翁うなづき

ぬ、龔恩録といへる文字、^{夢さめ}
□□□ てうかミ出でたり 得

二十一日 四時ヨリ起テ支度を為し田中公使を見送りに新橋汽市場まで行き帰
る次でニ二三屋三次にて万首唐人絶句及び哲□補を得たり

平井参来ル、藤田茂吉江転書

一翰拝呈仕候、過日之暴風而ハ其近辺ハ随分甚敷様ニ承り候^{得共}
御別条ハ
無之ト想像仕候、敝宅ハ少々之損害のミニ御座候、陳者一寸御願申上度候義
如左

平井参

右之人物至而温厚ナル者にて文章を好ミ時々小生方江参候、英[・]学[・]も[・]沼[・]津[・]ニ
在リ時^{少々ハ}修めキゾの文明史位ハ^{窮め候}
英書を^{漢学及ヒ作文}を教へ居り候、今の形勢にてハ彼に久住も無覺束

□讀書^{漢書作文}ニ付何レにしても何卒新聞社江入り自身ニ相応したる業を致し度志願ニ御座

候、恐入候得共本人江御逢被下前条御含置被下度、自然欠点も御座候ハ

、本人応分の業を御授ケ被下度奉願上候、拝面之上にて右奉願度ト存居候

処段々過行候間さし付ケ間敷候へとも本人差出申^{此段}
度^{可被下候}
御多用中をも不顧右之次第偏ニ御諒恕可被下候 頓首

○名越時孝の文を評し郵便に付す

二十二日 〈月〉大学ニ出ル、易、論語

二十三日 〈火〉秋季皇霊祭 式部寮ニ断ヲ出ス

今日秋季

皇霊祭ニ付

参内可仕候処所旁ニ付不参仕候

此段御届仕候也

月 日 官姓名印

式部寮

御中

用紙美濃紙

〈辟疆図杜詩注解 八冊 540〉

二十四日 〈水〉大学、易論孟 此日重野君大学教授ニ兼任 上塚「六日後初

而墓参」

二十五日 〈木〉大学、孟子 鍋島直彬殿ヨリ柳原殿ノ文（日野俊基卿ノ碑）

点削ヲ乞ニ来ル

二十六日 〈金〉大学、論語孟子 信夫恕軒ニ勸メラレ觀劇

二十七日 〈土〉

二十八日 〈日〉鍋島直彬殿邸ヲ訪フ

二十九日 〈月〉大学

三十日 御用召ニテ太政官ニ参ル

從五位

叙正五位

中村正直

ソレヨリ大学ニ出ル 午後二時ヨリ集議アル由ノ処差掛リ所旁ニテ断ヲ出

ス

〔敬字中村正直「文明東漸史序」切抜〕

十月一日 〈十七年十月〉水 大学 易泰彖伝、論語「南宮括」、孟子ハ休業

ス 大木、加藤二氏ニ抵リ名刺ヲ投ズ

二日 木 大学、孟子牽牛章 銀座ニ馬車ヲ見ニ行ク 牧野篤信来告别、西洋品行論ヲ贈ル

三日 金 大学江出勤ス 是日旧曆八月十五日ナリ

当歴覽既已藏弃之書籍而後搜求新書矣、不得妄買也

小刀入于袖不知其何時入也、但〔記〕于几上用之耳、無何探袖若有一物者出而見之小刀也、嗚乎危哉幸脱于危矣、可不慎哉

四日 〈土〉 一時夢覺て

福錢といへるを夢に聞く可相成ハ実□□福錢を得るありぬべし

〔貼紙〕 大学ヨリ帰り本伝寺ニ参詣ス

〔加藤桜老翁ニ三円肴料トシテ贈ル〕

大学易「同人大有象象」 浅艸辺ニ往ク

五日 〈日〉 鍋島直彬殿被訪柳原殿ノ文ヲ〔点〕削批還スルノ礼トシテ被参 酒

井張甫二日ニ没シタル故肴料を為持送ル 平井参、山田善四郎被参

是夜見金星〔ヒール〕与軒轅〔ヒール〕相近与木星又相近

六日 月 大学ニ出勤ス、易「謙豫象象伝」、論語「桓公公子糾」

七日 火 三時看星、土星在参井間、金木相近在軒轅〔マ〕 曆書曰是月之初木昏

火星在氏〔マルス〕宵見至月末即入蠍宮 ○水 星晨在室女宮〔メルキュリイ〕与B相近

○大学易、井上円了始テ出席ス

〔十七年十月〕

〔藤田茂吉来□節ノ切手ヲ贈ラル〕

八日 〈水〉 大学出勤ス、易、論語、孟子輪講〔交隣〕 雪宮 国章

九日 〈木〉 大学ニ出勤、孟子輪講 四書訓蒙集疏ヲ浅倉屋ヨリ持セ来ル

風邪ノ氣味ニ付客ヲ謝シテ不見 大学ヨリ帰路ニ鴈仙ニ立寄り 字貫枢要ヲ買フ

十日 今日ヨリ十三日迄向四日ノ間所勞不参届差出ス

〔渡辺信来〕

十一日

十二日 日曜 於鐵池上本門寺ニ詣ル 皆川氏著四書易詩書釈解ヲ取り寄ル

十三日 〈入浴〉

十四日 大学、井上円了課 乾卦 加藤氏ニ逢フ、婦人衣制之達シヲ返ス

豊橋人杉田六江ニ面会ス 浅田宗伯江書ヲ贈リ帰脾丸ヲ托ス、二円入り封ヲ

ヤル

十五日 学士会院集会ニ出席ス 西周、神田、加藤、重野、川田、細川、大鳥、

箕作両人、栗本、杉田、小中村、黒川、福羽、市川、伊藤、村上英俊、

杉亨ニ

〔文部省用地旧四軒寺跡〕

十六日 大学、孟子「明堂 託妻子 喬木」 嶋津家参観 坂部只次郎来ル

〔明治字典之事ニ付〕

十七日 新嘗祭 直吉ヲ使トシテ式部寮ニ断ヲ出ス 明久堂ニテ輟耕録〔マ〕 ヲ

買フ、浅艸辺マデ往ク

十八日 大学出勤、易 大日本地誌序ヲ艸ス

十九日 〈日〉 致富新書ヲ購ス 松村精一郎来ル

〔二十一日午後一時ヨリ相談会 二十三日三時ヨリ神田氏 二十五日大学卒業式〕

業式〕

大日本地誌序（一）

人之記憶有度猶腹之於食也、課子弟者宜度其可受之量而授之、若不度其可受而妄多授之、即与夫過量界食而傷脾胃者奚挾、每憾本邦地誌蕪雜曼衍未授可子弟者、今觀松村西莊所著簡而賅〔信而有徵〕 証地而問及史事 前者之憾解矣、抑余

更有所望二西莊者、別撮此書之要簡之文以供兒童誦讀与之並行不亦可乎、西莊才高識奧邃、方且勤學不倦、俟異日余重言是

二十日 〈月〉 大学出勤、易論語 斎藤氏江振二重行ニ付□□ニ招カル

二十一日 〈火〉 大学、支那哲学 相談会一時ヨリ

二十二日 〈水〉 大学、易、論語、孟子 重野氏ニ参ル

甲斐国東八代郡南八代村成器私学舎 加賀美平八郎 コノ人ニ手紙ヲ出ス

二十三日 大学出勤、孟子輪講

〈二十四日赴神田氏招、觀雷斧等古石〉

二十四日 勝安房、津田仙ヲ訪フ ロイドニ逢フ 四書注疏直解、葦陣雋語ヲ

得タリ

二十五日 〈土〉 大学ニ位授与式ニ出ル 〈十時十分迄ニ大学江参ル〉

快晴 山尾君ヨリ報告并婦人慈善会江の願書草案ヲ被頼

古賀先生ノ病ヲ訪フ 前田円来ル

二十六日 日曜日 畠田爽来ル碑文ノ礼トシテ十円ヲ贈ラル 山岡成章ニ小絹

ニ認メタルヲ届ケル 巻原敬助殿江参

二十七日 大学江出勤ス、易論語 百濟範真、桜井 来ル 中島梅仙来ル

梁同書「山岡」の端に数語を評す 及川静来ル書数種ヲ贈らる

高津柏樹より報告書の事ニ付云々、出来次第持参被致ルよし 百濟範真来る

〈二十八日午後一時ヨリ大学相談会〉

二十八日 〈火〉 大学江出勤ス、井上円了の易課 相談会 福田屋ニテ三省

録後編五冊 沢田屋ニテ唐炎宗屏風書釈文一冊を得る

お陸来 高島嘉右衛門来ル「不在ニテ不相見」

二十九日 〈水〉 今日ヨリ向三日之間所勞ニ付断リを大学に出ス 易経蒙

引「二十四本、三円五十銭」、福田屋ヨリ買入レル 烽火日記「亀井著八十

銭」ヲ買入レル積リ「琳瑯閣八十セシ」

三十日 格蘭牧師偕其妻来、此再至我邦以後始訪余居也

十一月一日 高津氏訓盲ノコトニ付参ル 西洋髪ヲカル

十一月二日 高島氏江参ル 重野、藤埜氏偕焉 藤野氏江焔脾湯ノ方ヲイヒヤ

ル

十一月三日 天朝節 快晴 揮毫百枚為和田氏 為鱗角作書 寄高島嘉右衛門

氏

十一月四日 大学、井上円了課 訓盲院委員会 稻荷宮一基ヲ八円ニテ求ム

十一月五日 大学、易上衛象□ス、論語三ス、孟子一ス、明道協会幹事

江左之通り差出ス「十七年七月ヨリ毎月六十セシ」 金貳円四十銭 七月ヨ

リ十月迄四ヶ月之分

六日 大学、孟子輪講 島沢徹源「介石公三年ノ法事ノ招キ」 加藤君ニ参ル

明日觀菊会ニ付問合セニ参ル

七日 御所江出ル 觀菊会実ニ盛大ナリ 夕刻服部一三送別会ニ枕橋八百松ニ

至ル

〈十一月九日十一時 立冬 日赤緯南一六度四二分〉

八日 大学、易「咸恒象象」 訓盲啞院報告書ヲ艸シ山尾氏江為持遣ハス

宮崎駿児来ル

九日 日曜 揮毫

佐田介石師三年忌辰ニ付伝法院江参ル 家人ハ信夫氏の招キにて井生村楼

ニ参ル 徂徠集便覽ヲ買入レル積リニ福田屋江申置 枳殻坂にて龍潭塩田蚊

々青松多寿色「二十五銭」にて獲る 余水序録とり申つかハす

〈塩田龍潭先生の書を得る〉

十日 月曜日 大学、易遯壮、論蚕箔之邦行 日蓮上人御書之事を赤羽根本屋

へ申ヤル

十一日 火 井上田了訟比易課 晚間鳥尾君ヲ高田ニ訪フ

十二日 今十二日ヨリ来ル十五日迄病氣引

十三日 入浴 加藤桜老訃至

十四日 甲斐東八代郡南八代成器舎 加賀美平八郎

右之人改正規則ヲ寄セ□申来ル

龍池密雄

弘法大師草法帖ヲ贈らる

小林伴七の為に揮毫ス ○吉田橘翁江活板ヲタノム

〈廿二日小雪 日 赤南緯二〇度二六〉

題拿破崙童年行狀記*

拿破崙天生豪傑略冠世、疑其不屑々讀書乃自為自為童子時

深沈
沈酣刻
埋頭卷

苦不知声色貨利、學問事功本末一源觀此益信

螢窓雪案勤苦專
開覽博物又多能

精矣紛華利為何物矣
世間有紛華□□矣
声利紛華為何物矣

拿破崙天生豪傑智勇蓋冠世、疑其不屑々讀書乃自為童子時螢窓雪案深沈不知

声色貨利、學問事功本末一源觀此益信

夕星マルス、メルキュレー月末 ○朝星ヴィナス在ヴィルゴ ジュピトル在
ニレオ サチュルン在トウラス与ゲミニ之間

十一月十五日 学士会院江断リヲ出ス

録内御書——録外御書六十七本、御書啓蒙四十本、十五円ニテ飯倉五丁目四

十四番地森江佐七ヨリ買入ル 董其昌掛幅三円ニテ高橋甲次郎ヨリ

十六日 山田栄造来ル 清水雪雄の為に揮毫

〈十二月七日大雪 日赤緯南二二度四二〉

十六日 早朝山尾氏ニ参リ木戸正二郎殿の悔ミを申述ル 明王寺僧龍池 書
を七十余枚寄附之義被頼

桂林館 甲府相生町四十八番地

桂林新紙の事ニ付頼ミ来ル

十七日 〈大学易〉今日法律學之開講 川上素六郎、水谷仁海〔岡山県備中国

本覺寺住職〕等来ル 曉艸黄石齋第五集詩序⁽²⁾ 又艸大学入門手引題意

十八日 大学江出勤ス、第四年生井上氏ノ課ナリ

十九日 〈水〉 大学、易〔彖象 家人睽卦〕 快晴 得欽宋篆文六經四書十本

3.15 説文通檢二本・70

二十日 〈木〉 大学、孟子課 中村棲英米親睦会ニ出る

二十一日 大学、孟子課

〈十二月廿一日冬至 日赤緯南二三度二六分五一秒〉

二十二日 大学、第六期生小試験前休 川田、三嶋、南摩氏、重野氏江参リ詩

文品評会ノコトヲ談じ置 田原秀毅昨日文部編輯局御用掛被命候趣吹聴ニ被

参

二十三日 日曜 揮毫〔昨日ヨリ明王院ノ為ニ七十余紙ヲ書ス〕 水谷仁海師

ヲ招キ法花経ノ話ヲ聴聞ス

「来ル十二月八日（月曜日）午後三時ヨリ御来駕ヲトシ品評会相催シ候間御
上度奉待上候也」重野、川田、南摩、三嶋、秋月江ハガキヲ以テ申ヤル 坂

部氏来ル

〈二十六日学士会院臨時集会〉

二十四日 月曜日 晴色可喜 大学出勤ス 鈴木喜久来ル、豊田英雄江転書ス

二十五日

二十六日 論語小試験 矢田部良吉、孟銘之礼ニ来ル

《学士会院臨時会へ断リヲ出ス》

二十七日 足未痊終日不出戸

二十八日 大学、第一期生試験 小出雅雄書来ル

二十九日 大学「小試験ニ付休」 木戸正二郎侯葬式ニ会ス 山尾庸三君、大

木喬任君、吉井友実君、土方久元君、井上勝君、岩倉具定君、尾崎三郎君、

福地源一郎君、松野礪君、児玉淳一郎君、山田顕義君、安川□成君、池田謙

斎君、矢島作郎君、川田剛君等モ会葬セリ

三十日 《明治十七年》日 為土屋勝秤等作書 水谷仁海師見過「因招而至」

得東皐詩史、羅念庵文要

十二月一日 月 大学、易蹇解象象、論語顔淵問為邦以下数章 得成島柳北君

訓 龜谷省軒氏来

訓盲啞院ヨリ左之通申来ル

以廻章得御意候、然者兼而山尾会長ヨリ之命も有之候ニ付、本年後期ヨリハ
第三箇日ニ分て試験式執行致度存候処、来ル廿一ハ日曜ニ当リ候へ者、其前
十八日ヨリ廿日迄ニ可致哉、但シ廿二日ヨリ廿四日迄ニ可致哉、前後日繰之
処兼而御決答置被下度奉願候也

訓盲啞院

中村正直様、矢島作郎様、津田仙様

向嶋須崎村百六十四番地 成島復三郎殿ヨリ柳北君の十一月卅日十一時死去
被致候報来る、葬式ハ来三日午後一時出棺、本所押上村本法寺仏式埋葬之由
報じ来る

上駒込村二十八番地 木戸孝正君ヨリ

二日 大学、井上田了易小畜象象

築地本願寺ニ木戸正二郎殿之法事ニ付参ル

佐々木高行老母卅日死去、来ル三日午後一時出棺、仏式ヲ以テ築地本願寺へ
送葬致候、此段御通知申上候也 親族 国久寛次

三日 大学ニ出勤、孟子「以力仮仁者覇」 柳北（文靖）君葬儀ニ会ス 艸

山集「一二三、三冊」買入レル、今迄ノ欠本完璧トナル

四日 大学出勤、孟子「人皆有不忍人之心」 寺田望南渡清求法ニ付八百松ニ

於テ送別会アリ、出席ス

評長梅外君詩、示斯文会諸彦

平生学殖之富筆力之雄 如俯拾遺耳 所謂文章在六經者、
蓋先生自得之言也 自信乎而成

五日 徵恙 大学江今日明日不参届ヲ差出ス 昨日八百松送別会ノ帰路ニ妙

経新注十本三円八十銭ニテ得ル

六日 文章詩作ノ清書ヲ自ラ為シ置クコトヲ創意シ、永井重仁氏墓銘ヲ写ス

木戸孝正殿為礼被参

「霜氣□□御同□奉祈候、拙生事数日前ヨリ他行□不音奉恐入候、今日鳥尾
君等ニ面晤種々之話之末確聞仕候ハ事実来春欧米之内へ派遣被相成候趣、依
而先生ニ同行之義相薦候処同君も先生ニ於而思召ハ如何成と申居候故、先生
ニ於而ハ御同意ト決然之事と小生限り陳述仕置候、兼々御深慮も奉伺居候事

故、此際之事御志願之御一条とも奉存候間、御過責之御念慮を止させられ何
卒御西遊に就奉祈候、先生ニ於而御同意ニ有之候ハ、鳥尾ニ於而ハ否決而有
之間敷奉存候、右ニ付万一鳥尾ニ御参会之節ハ可然御話被遊度不堪点禱候
草々拝具 佐藤麟角

六日夜認

中村先生 述史

蠣壳町三丁目十番地ヨリ書

「前略 本日鳥尾、西□両君も来、近日欧米之内へ参候由ニ付先生御同行之

義話合候処、同氏も先生ニ於而不〇有之候ハ、宜敷義申居候故、必先生ニ於
而も御同意と申し置候故、先生ニ於而御航洋之御念慮ニ御座候ハ、此事必ず
行ハレ可申候故、貴下ヨリモ傍御すゝめ有之候度候、万一事行ナハレ候ハ
、一二年間〇〇ニ歐洲御遊悠被遊御帰朝之上ハ宮内省侍講位ハ無論と奉存候、
且左無ニ而も益先生を泰斗と可奉仰御座候間、年来吾々報恩之一分とも奉存
候故、右之次第ハ何卒御内々御相談〇〇度也

七日 日曜日

八日 大学、夫婦象象 是日品評会ヲ催ウシ重野安繹、秋月胤永、南摩綱紀、
三嶋、川田、島田諸君被参

九日 大学、井上円了、履、泰 本伝寺江弘参ニ参ル 古賀先生墓所江参詣ス
十日 大学、四時間 塩谷時敏ト浅艸ニ至リ書肆ヲ閱ス、浅草奥山魚十二寄リ
共傾一杯 得本朝法華伝三本 □蓋集図解

十一日 大学孟子輪講 往鳥尾君宅道麟角薦余事、托以此事曰、請自然可成即
成之矣

〈父君七十三没 母君五十五没〉

不肖在母君胎内時。母君書妙経七字題目。不肖稍長時。得見其紙葉之遺者。
恨罹池魚之災。今不復有也。不肖今年五十有二。雖發願甚遲。請自今転読
法華五十五遍。乃母君壽命之數也。不知何時得滿此數、抑以有公務人事学
業等自不可忽者。応^倫其暇余而為之。不得期以急速。但積日月之久得了此^世
願以酬題目書写罔極之恩。他日倘見^{母君}坐蓮花。現菩薩相。則不肖之願足^其

矣。明治十七年十二月一日始
十一日自起此願読妙経至今十一日読第一遍畢爾後当
記遍數此其始也

甲申十二月八日三島君有同人社文会有感之作^{見示因}次其韵

昌平疊裏結交親、辛苦同嘗三十春、珍重如何不相愛、將為尚齒会中人
十二日 大学、論語孟子輪講出席 岡本監輔来 田島弥平来 夜説困井象象
伝、妙法経信解品

十三日 「土曜」(十月廿六日丁酉 柳) 大学易「困井象象」 十五日賢
所ニ於テ神樂ヲ被為行ニ付勅任人召御断旨ノ義ヲ加藤君ニ願之義五十嵐氏江
タノミ置ク

〈柳北君長田大人法事ノ配物被送致〉

十四日 「日曜」(十月廿七日戊戌星) 朝読法師品、宝塔品

十五日 是日氣力不健頭重故不至大学及学士会院 西郷從理君十日没セシル故
ヲ報シ来ル 朝読

十六日 火 大学、井上円了試験 第二時読了妙経、是為第二遍

十七日 水 大学

十八日 木 大学 浅艸江廻ル、悉曇ノ本ヲ得ル

十九日 金 大学「青山氏ノ試験」 訓盲院試験ニ参ル「山尾氏更科蕎麦ヲ生

徒ニ振舞」

二十日 曉読信解品 是日所勞断ヲ大学江出ス「訓盲院ニテ看試験并忘年会」

二十一日 「日曜」草「無息軒墓銘」(3) 六書分類「十四本」四円二十五銭ヲ

浅倉氏ヨリ為持来ル

二十二日 大学出勤 大礼服ヲ大倉裁縫店ニ誂フ

二十三日 藤堂様忘年会ニ参ル

二十四日 大学出勤、生徒ノ文ヲ点刪ス

〈廿五日朝藤宮三九郎来ル約束〉

廿五日 同人社忘年会 今日ヨリ大学休

廿六日 津田仙来、朴命和之事 晚第七時読畢妙経、是為第三遍

廿七日 読西谷名目上卷

廿八日 本伝寺江参ル 西谷名目四本「七十銭」新本ヲ買入レル

廿九日 餅ヲ舂カセル、但シ今年□之利米として忒俵内壹俵餅米也、ソレヲツカセル

三十日 木村芥舟江夢題を評して遣る 三島氏江品評ヲシテヤル 今朝第四遍目ヲ読ミ畢ル

八十餘□山「篆字」

太政官 從一位 一 外務省 正四位 二 文部省 正四位 一

一品 一 從四位 五 從四位 一

正四位 十一 從二位 一 正五位 三

從三位 一 正五位 一

賞勲局 從三位 一 内務省 正四位 一 農商務省 正四位 一

從四位 二 正五位 三 從四位 二

二品 一 從五位 二 正五位 二

正四位 五 大藏省 從四位 一 後部省 正四位 一

参事院 正四位 三 從四位 九 正四位 一 從四位 一

從四位 九 正五位 三 司法省 正四位 一

從二位 一 正五位 四 陸軍省 從四位 三

正三位 一 從四位 二 正五位 六

會計院 從四位 二 正四位 二 正五位 四

計院舎 正五位 一 從四位 二 宮内省 正四位 四

修史館 正五位 十一 從四位 四

從二位 一 海軍省 正五位 六

元老院 正三位 一 正五位 二 正四位 一 警視庁 正五位 一

從三位 一 從五位 二 從四位 三

正四位 二 正五位 八

從四位 三十九

合二百七十四名

昔有農家兄弟争産、其父諭勸和不聽、乃捆束木條為一束、其子折、不能断、父曰試逐條抽出次第折之能断否、於是莫不隨手而断、父曰兄弟猶如此、本條合則強、分則弱、強則人敬之、弱則人侮之、諺曰合和者勢、力也、木猶爾、況人乎

信濃国北佐久郡志賀村 神津吉助

海軍 正四 川村

從四位 樺山 中牟田 伊東

正五位 真木 仁□ 赤松 柳 松村 伊東 藤 紀田 戸塚



〔挿図〕

注

①「大日本地誌序」『敬宇文集』卷九載録。

②「黄石齋第五集詩序」『敬宇文集』卷十四載録。か。

③「岡田無息軒墓表」『敬宇文集』卷十六載録。か。